

学内広報

2003. 7. 9
東京大学広報委員会

ロシア・サンクトペテルブルグ国立大学へ『大日本史料』など史料集750冊を寄贈する



サンクトペテルブルグ国立大学（手前はネヴァ川）と史料集寄贈に関する交換（史料編さん所長石上英一教授と東洋学部長ステブリン＝カメンスキー教授）

（史料編さん所）

（29ページに関連記事）

目次

一般ニュース	2	集750冊をロシアへ寄贈する	
東京大学学生表彰「東京大学総長賞」の推薦受付について、平成14年度学部卒業者及び大学院修了者（修士課程・博士課程）の就職状況、学生のアルバイト及びアパート・下宿等の紹介状況、事務職員海外研修報告		掲示板	30
部局ニュース	29	平成16年度東京大学学術研究奨励資金による国際交流助成事業募集について、第20回理学系研究科技術シンポジウム、「教養学部報」第467（7月2日）号の発行、医科学研究所「オープンキャンパス」開催、地震研究所「一般公開と公開講義」開催、総合研究博物館特別展示「東京大学学位記」展－博士研究にふれる－	
大学院人文社会系研究科・文学部で外国人留学生等との懇親会開かれる、ハワード・ガードナー教授講演会、日本史の基幹史料		事務連絡（人事異動（教官、事務官））	34
		訃報（金澤武名誉教授）	35
		淡青評論「駒場と本郷」	36

≡ 一般ニュース ≡

東京大学学生表彰「東京大学総長賞」の推薦受付について

本学の学生を対象として、学業、課外活動、各種社会活動、大学間の国際交流等の各分野において、「優れた評価を受けた」「優秀な成績を収めた」「本学の名誉を高めた」などの顕著な功績のあった個人又は団体に、総長が表彰を行う「東京大学総長賞」が平成14年度から設けられている。

この表彰は、本学教職員・学生からの推薦に基づき、「東京大学学生表彰選考委員会」（以下「選考委員会」という。）が選考にあたり総長が表彰するものである。

推薦にあたっては、個人・団体ともに随時受け付けることとしており、別記様式1・2による候補者推薦書（別記様式1・2は、東京大学ホームページをご覧ください。）を学生部学生課教養掛（内線22529）まで提出することとしている。

選考委員会では、推薦された候補者の中からその内容を審査のうえ、「東京大学総長賞」として相応しいものを決定する。

表彰は、原則として9月（秋）及び3月（春）の年2回実施することとしており、このたび、平成15年度の推薦基準が以下のとおりまとめられ、推薦の受付を行っている。

今年度第1回表彰の授与式は、9月30日（火）に農学生命科学研究科弥生講堂で行うことを予定しており、第1回の推薦締切りは9月4日（木）とする。

なお、第2回表彰は平成16年3月末を予定しているが、日程の詳細は未定であり、決まり次第再びお知らせする。

東京大学学生表彰「東京大学総長賞」の推薦基準

- 1(1)学業において、研鑽に励み、他の学生の範となった個人若しくは団体
- (2)学業において、学界等により優れた評価を受け、本学の名誉を高めた個人若しくは団体
- 2 課外活動において、国内外の各種スポーツ、競技、演奏、展示、発表等で優秀な成績を収め、本学の名誉を高めた個人若しくは団体又は課外活動を支援し、課外活動の充実と振興に著しい貢献をした個人若しくは団体
- 3 環境保全、災害救援、社会福祉、青少年育成、海外援助協力等の各種社会活動において、活動実績が認められ、他の学生の範となった個人若しくは団体又は社会的に優れた評価を受け、本学の名誉を高めた個人若しくは団体
- 4 大学間の国際交流において、相互理解と友好関係を深め、本学の国際交流の発展に著しい貢献をした個人又は団体

5 その他、これらに準ずるもので、「東京大学総長賞」に相応しい貢献があった個人又は団体

上記基準による推薦者については、次のとおりとする。

- 基準1(1) 学部学生については学部長
大学院学生については研究科長・学府長
基準1(2)及び基準2～5 自薦、他薦を問わない

〔参考〕 平成14年度東京大学学生表彰
「東京大学総長賞」受賞者

第1回 平成14年10月8日（火）
（農学生命科学研究科 弥生講堂）

- | | |
|------|---|
| 山田 淳 | 経済学部3年
最年少七大陸最高峰制覇 |
| 小野正嗣 | 総合文化研究科博士課程3年
第15回三島由紀夫賞受賞 |
| 和 愛軍 | 農学生命科学研究科博士課程3年
森林環境に関する社会活動及び国際交流
運動会応援部 熱心な応援活動により本学の課外活動
支援に著しく貢献 |

第2回 平成15年3月26日（水）（大講堂）

- | | |
|---------|--------------------------------------|
| 水口将輝 | 工学系研究科博士課程3年
2002先端科学技術大賞フジテレビ賞受賞 |
| 中野裕昭 | 新領域創成科学研究科博士課程1年
世界初ウミユリの人工孵化に成功 |
| 加毛 明 | 法学部4年
法学部最優秀成績者 |
| 小島武仁 | 経済学部4年
経済学部最優秀成績者 |
| 中田栄介 | 薬学部4年
薬学部最優秀成績者 |
| 音楽部管弦楽団 | 大学公式行事への演奏協力及び各種演奏活動 |

（学生部）

平成14年度学部卒業者及び大学院修了者（修士課程・博士課程）の就職状況

平成14年度の学部卒業者及び大学院修了者の就職状況集計結果及び概況は次のとおりです。（調査基準日は平成15年5月1日現在）

1. 平成14年度学部卒業者及び大学院修了者の就職状況集計結果

- (1) 卒業者及び修了者のうち、就職希望者数と就職者数及び非就職者数とその内訳を、学部別、研究科別にそれぞれの表1として集計
- (2) 就職者のうち、産業別の就職者数を学部別、研究科別にそれぞれの表2として集計
- (3) 就職者のうち、企業規模別及び教育・公務等別への就職者数を学部別、研究科別にそれぞれの表3として集計
- (4) 就職率等や企業規模別及び産業別の就職状況について、学部卒業者、大学院修了者別にそれぞれ過去10年の動き（産業別の就職状況は過去5年分）を、就職状況の推移としてグラフで示した。

2. 平成14年度学部卒業者及び大学院修了者の概況

学部卒業者は、卒業者数3,380人のうち就職希望者は1,106人（32.7%）、就職者は1,103人（32.6%）で就職を希望した者の99.7%が就職している。

非就職者2,277人（67.4%）と非就職の割合が高いのは、その大半を大学院進学者（1,642人）で占めており、全卒業者数に対する割合は48.6%と進学率が就職率の32.6%を上まわっている。この傾向は平成9年度から引き続いている。また、非就職者のうち261人（23.7%、全卒業者数に対する割合は7.7%）が翌年の受験（公務員試験、司法試験、その他資格試験や進学等）を目指す者であった。

大学院修士課程修了者は、修了者数2,673人のうち就職希望者は1,390人（52.0%）、就職者は1,368人（51.2%）で就職を希望した者の98.4%が就職している。非就職者は1,305人（48.8%）で、そのうち1,088人（40.7%）が博士課程への進学者であり、非就職者の83.4%を占めた。

大学院博士課程修了者は、修了者数1,371人のうち就職希望者は619人（45.1%）、就職者は591人（43.1%）で就職を希望した者の95.5%が就職している。非就職者は449人（32.7%）であるが、奨励研究員等も非就職者としてカウント（17.7%）してある。

- 平成14年度 学部別卒業者の就職状況
 平成14年度 大学院（修士課程）研究科別修了者の就職状況
 平成14年度 大学院（博士課程）研究科別修了者の就職状況

- 平成14年度 学部卒業者の産業別就職状況
 平成14年度 修士課程修了者の産業別就職状況
 平成14年度 博士課程修了者の産業別就職状況
 平成14年度 学部卒業者の企業規模別就職状況
 平成14年度 修士課程修了者の企業規模別就職状況
 平成14年度 博士課程修了者の企業規模別就職状況
 就職状況の推移（学部学生）

1. 卒業者数等及び割合（過去10年）
2. 産業別就職状況の推移・全産業別（過去5年）
3. 産業別就職状況の推移・製造業の内訳（過去5年）

就職状況の推移（大学院修士課程）

1. 課程修了者数等及び割合（過去10年）
2. 産業別就職状況の推移・全産業別（過去5年）
3. 産業別就職状況の推移・製造業の内訳（過去5年）

就職状況の推移（大学院博士課程）

1. 課程修了者数等及び割合（過去10年）
2. 産業別就職状況の推移・全産業別（過去5年）
3. 産業別就職状況の推移・製造業の内訳（過去5年）

（学生部）

[平成15年5月1日現在]
[単位：人]

平成 14年度 学部別卒業者の就職状況

区分	学部別										合計	比率(%)	前年度同期 比率(%)		
	法学部	経済学部	文学部	教育学部	教養学部	理学部	工学部	農学部		医学部				薬学部	
								農学	獣医	医学	健康・看護				
学部卒業者数 (A)	635 (106)	361 (48)	381 (130)	89 (39)	169 (44)	313 (33)	901 (61)	275 (62)	27 (7)	107 (22)	42 (18)	80 (27)	3380 (597)	100.0 (100.0)	100.0 (100.0)
就職希望者数 (B)	352 (48)	254 (35)	210 (74)	48 (20)	54 (14)	18 ()	117 (7)	38 (7)	8 (3)	6 ()	4 (4)	1 (1)	1106 (213)	32.7 (35.7)	35.5 (35.6)
就職者数 (C)	352 (48)	254 (35)	210 (74)	45 (19)	54 (14)	18 ()	117 (7)	38 (7)	8 (3)	6 ()	4 (4)	1 (1)	1103 (212)	32.6 (35.5)	32.6 (35.0)
その他 (A-C)	283 (58)	107 (13)	171 (56)	44 (20)	115 (30)	295 (33)	784 (54)	237 (55)	19 (4)	107 (22)	36 (14)	79 (26)	2277 (385)	67.4 (64.5)	67.4 (65.0)
学部再・入学者	12 (4)	11 (1)	3 (1)	3 ()	3 ()	3 ()	1 ()	5 ()	2 ()	40 (7)	1.2 (1.2)	0.7 (1.0)			
大学院修士課程進学者	52 (12)	42 (5)	95 (30)	24 (12)	107 (27)	274 (32)	726 (48)	207 (48)	11 (2)	5 ()	27 (12)	72 (23)	1642 (251)	48.6 (42.0)	47.9 (39.5)
留学者	3 ()	3 (1)	3 (1)	3 ()	3 ()	3 ()	1 (1)	7 ()	0.2 (0.3)	0.4 (1.1)					
研究生	4 ()	4 ()	4 ()	1 ()	1 ()	1 ()	20 (1)	4 (1)	4 ()	1 ()	1 ()	34 ()	34 (2)	1.0 (0.3)	0.9 (1.4)
自営業・家事従事者	40 ()	6 ()	12 (1)	2 (1)	1 (1)	7 ()	34 (4)	26 (6)	4 (2)	1 ()	1 ()	120 ()	120 (22)	3.6 (3.7)	1.1 (1.9)
その他 [上記以外のもの]	219 (42)	14 (1)	54 (23)	14 (7)	7 (2)	15 (1)	2 ()	102 ()	2 ()	5 (2)	12.8 (16.9)	16.4 (20.1)	434 (101)	12.8 (16.9)	16.4 (20.1)
就職希望率 (B/A*100)	55.4 (45.3)	70.4 (72.9)	55.1 (56.9)	53.9 (51.3)	32.0 (31.8)	5.8 ()	13.0 (11.5)	13.8 (11.3)	29.6 (42.9)	14.3 (22.2)	32.7 (35.7)				

注：()内数字は、女子学生数を内数でしめたものである。

修士-表1

平成14年度 大学院(修士課程)研究科別修了者の就職状況

[平成15年5月1日現在]

[単位：人]

区分	研究科別	医学系											合計	前年度同 比率(%)				
		人文社会系	教育学	法学政治学	経済学	総合文化	理学系	工学系	農学生命科学農学	医学	保健学	薬学系			数理科学	新領域創成科学	学際情報学府	情報理工学系
課程修了者数(A)		167 (67)	49 (25)	71 (23)	57 (9)	211 (69)	354 (88)	752 (87)	295 (104)	16 (4)	49 (32)	83 (27)	41 (4)	349 (83)	40 (19)	139 (5)	2673 (646)	100 (100)
就職希望者数(B)		40 (19)	8 (5)	49 (15)	25 (3)	62 (18)	131 (29)	549 (58)	151 (59)	3 (1)	9 (5)	30 (16)	15 (1)	200 (43)	21 (13)	97 (3)	1390 (288)	52.0 (44.6)
就職者数(C)		27 (13)	8 (5)	49 (15)	21 (3)	62 (18)	131 (29)	549 (58)	151 (59)	3 (1)	9 (5)	30 (16)	15 (1)	200 (43)	16 (8)	97 (3)	1368 (277)	51.2 (42.9)
その他(A-C)		140 (54)	41 (20)	22 (8)	36 (6)	149 (51)	223 (59)	203 (29)	144 (45)	13 (3)	40 (27)	53 (11)	26 (3)	149 (40)	24 (11)	42 (2)	1305 (369)	48.8 (57.1)
学部再・編入学者									1			1		1			4	0.1 (0.4)
修士課程再・編入学者																		
博士課程進学者		118 (45)	35 (16)	13 (3)	30 (6)	143 (46)	204 (50)	156 (18)	120 (36)	13 (3)	32 (23)	49 (10)	24 (2)	95 (19)	15 (4)	41 (2)	1088 (238)	40.7 (36.8)
留学者						1	2							1	1		5	0.2 (0.6)
研究生		6	1		1		1	11	4			2			1		27	1.0 (0.8)
自営業・家事従事者		13 (6)	5 (3)						19 (8)				1	6 (5)	1 (1)		45 (24)	1.7 (3.7)
その他 [上記以外のもの]		3 (3)		9 (5)	5 (1)	5 (4)	16 (8)	36 (9)			8 (4)	1 (1)		46 (15)	6 (5)	1 (1)	136 (53)	5.1 (8.2)
就職希望率 (B/A*100)		24.0 (28.4)	16.3 (20.0)	69.0 (65.2)	43.9 (33.3)	29.4 (26.1)	37.0 (33.0)	73.0 (66.7)	51.2 (56.7)	18.8 (25.0)	18.4 (15.6)	36.1 (59.3)	36.6 (25.0)	57.3 (51.8)	52.5 (68.4)	69.8 (60.0)	52.0 (44.6)	

注：()内数字は、女子学生数を内数でしめたものである。

博士-表1

平成 14年度 大学院(博士課程)研究科別修了者の就職状況

[平成15年5月1日現在]
[単位：人]

区分	研究科別	人文社会系	教育学	法学政治学	経済学	総合文化	理学系	工学系	農学生命科学			医学系		薬学系	数理科学	新領域創成科学	合計	比率(%)	前年度同率(%)
									農学	獣医	農学	医学	保健学						
課程修了者数(A)		144	34	21	34	145	190	322	168	24	189	31	42	27	1371	100.0	100.0		
		(61)	(13)	(5)	(5)	(55)	(27)	(43)	(50)	(3)	(51)	(25)	(8)	(3)	(349)	(100.0)	(100.0)		
		92	9	8	27	60	77	123	44	12	121	10	21	15	619	45.1	48.8		
		(43)	(2)	(2)	(3)	(17)	(10)	(15)	(18)	(1)	(33)	(9)	(4)	(3)	(160)	(45.8)	(47.3)		
就職希望者数(B)		72	9	8	27	60	77	123	44	12	121	10	21	7	591	43.1	45.7		
		(31)	(2)	(2)	(3)	(17)	(10)	(15)	(18)	(1)	(33)	(9)	(4)	(1)	(146)	(41.8)	(42.2)		
その他(A-C)		72	25	13	7	85	113	199	124	12	68	21	21	20	780	56.9	54.3		
		(30)	(11)	(3)	(2)	(38)	(17)	(28)	(32)	(2)	(18)	(16)	(4)	(2)	(203)	(58.2)	(57.8)		
学部再・編入学者						1									1	0.1			
		()	()	()	()	(1)	()	()	()	()	()	()	()	()	(1)	(0.3)	()		
修士課程再・編入学者																			
		()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()		
博士課程再・編入学者		5													5	0.4	0.1		
		(3)	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	(3)	(0.9)	()		
留学者						9	1				5	1	4		20	1.5	0.8		
		()	()	()	()	(6)	(1)	()	()	()	()	(1)	(1)	()	(9)	(2.6)	(1.5)		
奨励研究員等		43	6	3	7	22	73	9	48	8			13	10	242	17.7	16.1		
		(12)	(3)	()	(2)	(6)	(8)	()	(11)	(2)	()	()	(2)	(1)	(47)	(13.5)	(15.6)		
自営業・家事従事者		20							42	1					63	4.6	6.2		
		(12)	()	()	()	()	()	()	(15)	()	()	()	()	()	(27)	(7.7)	(12.3)		
その他 [上記以外のもの]		4	19	10		53	39	190	34	3	63	20	4	10	449	32.7	31.0		
		(3)	(8)	(3)	()	(25)	(8)	(28)	(6)	()	(18)	(15)	(1)	(1)	(116)	(33.2)	(28.4)		
就職希望率 (B/A*100)		63.9	26.5	38.1	79.4	41.4	40.5	38.2	26.2	50.0	64.0	32.3	50.0	55.6	45.1				
		(70.5)	(15.4)	(40.0)	(60.0)	(30.9)	(37.0)	(34.9)	(36.0)	(33.3)	(64.7)	(36.0)	(50.0)	(100.0)	(45.8)	()	()		

注：()内数字は、女子学生数を内数でしめしたものである。

学部-表2

平成 14年度 学部卒業者の産業別就職状況

[平成15年5月1日現在]

[単位：人]

産業別	学部別								農学部		医学部		薬学部	合計	比率(%)
	法学部	経済学部	文学部	教育学部	教養学部	理学部	工学部	農学	獣医	医学	健康・看護				
農・林・漁・水産業		1				1		2					4	0.4	
	()	()	()	()	()	()	()	(1)	()	()	()	()	(1)	(0.5)	
鉱業			3										3	0.3	
	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	
建設業	3	1	4				3						11	1.0	
	()	()	(1)	()	()	()	(2)	()	()	()	()	()	(3)	(1.4)	
製	食料品製造業	2	3	8		1		3	1				18	1.6	
		()	(1)	(5)	()	()	()	(1)	()	()	()	()	(7)	(3.3)	
	繊維工業	1				1							2	0.2	
		()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	
	出版・印刷・同関連業			51			1						52	4.7	
		()	()	(16)	()	()	()	()	()	()	()	()	(16)	(7.5)	
	化学工業	2	1				1		3				7	0.6	
		()	()	()	()	()	()	()	(1)	()	()	()	()	(0.5)	
	石油・石炭製品製造業	1	1		1			1					4	0.4	
		()	()	()	(1)	()	()	()	()	()	()	()	(1)	(0.5)	
造	鉄鋼業	1	3				2						6	0.5	
		()	(1)	()	()	()	()	()	()	()	()	()	(1)	(0.5)	
	非鉄金属製造業		1										1	0.1	
		()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	
	金属製品製造業			6									6	0.5	
		()	()	(1)	()	()	()	()	()	()	()	()	(1)	(0.5)	
	機械製造業			1		2		2					5	0.5	
		()	()	(1)	()	()	()	()	()	()	()	()	(1)	(0.5)	
	電気機械器具製造業	13	12	14	1	1	1	13					55	5.0	
		()	(2)	(5)	(1)	()	()	()	()	()	()	()	(8)	(3.8)	
業	輸送用機械器具製造業	11	13	3	1	1	9						38	3.4	
		(2)	(1)	(2)	(1)	(1)	()	()	()	()	()	()	(7)	(3.3)	
	光学時計測器・医療機械製造業		1				5						6	0.5	
		()	(1)	()	()	()	()	()	()	()	()	()	(1)	(0.5)	
その他の製造業	3	4	3		1		1					12	1.1		
	()	(1)	(2)	()	(1)	()	()	()	()	()	()	(4)	(1.9)		
小計	34	39	86	3	7	2	34	3	4			212	19.2		
	(2)	(7)	(32)	(3)	(2)	()	()	(1)	(1)	()	()	(48)	(22.6)		
卸売・小売業	10	12	5		2	1	2	4				1	37	3.4	
	(2)	()	(3)	()	(1)	()	()	()	()	()	()	(1)	(7)	(3.3)	
金融・保険・不動産業	67	78	14	3	7	3	12	10					194	17.6	
	(8)	(8)	(4)	(2)	(2)	()	()	(3)	()	()	()	()	(27)	(12.7)	
運輸・通信・電気・ガス・水道業	44	25	40	15	12	2	26	3					167	15.1	
	(7)	(1)	(13)	(4)	(2)	()	(1)	()	()	()	()	()	(28)	(13.2)	
サービス業	28	61	24	12	14	5	30	11	3		1		189	17.1	
	(6)	(9)	(10)	(4)	(4)	()	(1)	(1)	(1)	()	(1)	()	(37)	(17.5)	
教育		1	7	1	2			1					12	1.1	
	()	(1)	(2)	(1)	()	()	()	(1)	()	()	()	()	(5)	(2.4)	
公務	108	34	20	9	8	2	8	4	1				194	17.6	
	(10)	(9)	(7)	(5)	(3)	()	(3)	()	(1)	()	()	()	(38)	(17.9)	
公共企業体					2	2							4	0.4	
	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	
その他	58	2	7	2			2				5		76	6.9	
	(13)	()	(2)	()	()	()	()	()	()	()	(3)	()	(18)	(8.5)	
合計	352	254	210	45	54	18	117	38	8		6	1	1103	100	
	(48)	(35)	(74)	(19)	(14)	()	(7)	(7)	(3)	()	(4)	(1)	(212)	(100)	

注：()内数字は、女子学生数を内数でしめたものである。

平成 14年度 修士課程修了者の産業別就職状況

[平成15年5月1日現在]

[単位：人]

研究科別 産業別	人文社会系	教育学	法学政治学	経済学	総合文化	理学系	工学系	農学生命科学農学	医学系		薬学系	数理科学	新領域創成科学	学際情報学府	情報理工学系	合計	比率(%)
									医学	保健学							
農・林・漁・水産業	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()
鉱業	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	1	()	()	1	0.1
建設業	()	()	()	()	()	1	41	1	()	()	()	()	6	()	()	49	3.6
食料品製造業	()	()	()	()	()	6	5	33	()	()	3	()	7	()	()	54	3.9
繊維工業	()	()	()	()	()	()	1	1	()	()	()	()	4	()	()	6	0.4
出版・印刷・同関連業	()	()	()	()	()	1	6	5	1	()	()	1	4	()	()	18	1.3
化学工業	1	()	()	()	()	18	3	32	()	()	17	()	8	()	()	109	8.0
石油・石炭製品製造業	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()
鉄鋼業	()	()	()	()	()	1	10	()	()	()	()	()	7	()	()	18	1.3
非鉄金属製造業	()	()	()	()	()	()	4	1	()	()	()	()	()	()	()	5	0.4
金属製品製造業	()	()	()	()	()	()	6	()	()	()	()	()	()	()	()	6	0.4
機械製造業	()	()	()	()	()	()	40	()	()	()	()	()	4	()	()	44	3.2
電気機械器具製造業	()	1	1	()	()	14	96	3	()	()	()	2	22	()	51	190	13.9
輸送用機械器具製造業	()	()	()	()	()	5	31	()	()	()	()	2	2	()	2	42	3.1
光学時計測器・医療機械製造業	1	()	1	()	()	()	39	()	()	()	()	()	()	()	5	46	3.4
その他の製造業	()	()	()	()	14	9	17	1	()	1	()	()	18	1	()	61	4.5
小計	2	1	2	()	14	54	288	76	1	1	20	5	76	1	58	599	43.8
卸売・小売業	1	()	1	()	1	2	2	8	()	()	2	()	4	()	()	21	1.5
金融・保険・不動産業	()	()	12	5	5	8	30	5	()	()	()	4	8	1	8	86	6.3
運輸・通信・電気・ガス・水道業	9	()	7	2	14	23	78	14	()	()	()	2	57	3	16	225	16.4
サービス業	2	()	10	8	17	24	44	28	()	3	2	()	18	8	9	173	12.6
教育	5	1	()	()	4	()	4	2	()	1	1	2	()	1	()	21	1.5
公務	4	1	13	4	3	13	39	14	1	()	5	2	11	2	6	118	8.6
公共企業体	()	()	()	()	()	1	()	()	()	()	()	()	()	()	()	1	0.1
その他	4	5	4	2	4	5	23	3	1	4	()	()	19	()	()	74	5.4
合計	27	8	49	21	62	131	549	151	3	9	30	15	200	16	97	1368	100

注：()内数字は、女子学生数を内数でしめたものである。

平成 14年度 博士課程修了者の産業別就職状況

[平成15年5月1日現在]

[単位：人]

研究科別 産業別	人文社会 系	教育学	法学政治 学	経済学	総合文化	理学系	工学系	農学生命科学		医学系		薬学系	数理科学	新領域創 成科学	合 計	比率(%)
								農学	獣医	医学	保健学					
農・林・漁・水産 業	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()
鉱 業	()	()	()	()	()	1	()	()	()	()	()	()	()	()	1	0.2
建設業	()	()	()	()	()	1	6	1	()	()	()	()	()	()	8	1.4
	()	()	()	()	()	()	(1)	(1)	()	()	()	()	()	()	(2)	(1.4)
製 造 業	食料品製造業	()	()	()	()	()	()	1	()	()	()	1	()	()	2	0.3
	繊維工業	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()
	出版・印刷・ 同関連業	()	()	()	()	1	()	()	()	()	()	()	()	()	1	0.2
	化学工業	()	()	()	()	()	6	5	8	2	()	14	()	()	35	5.9
		()	()	()	()	()	(2)	(1)	(2)	()	()	(1)	()	()	(6)	(4.1)
	石油・石炭製 品製造業	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()
	鉄鋼業	()	()	()	()	()	1	()	()	()	()	()	()	()	1	0.2
	非鉄金属製 造業	()	()	()	()	()	()	3	()	()	()	1	()	()	4	0.7
		()	()	()	()	()	()	(2)	()	()	()	(1)	()	()	(3)	(2.1)
	金属製品製 造業	()	()	()	()	()	()	4	()	()	()	()	()	()	4	0.7
		()	()	()	()	()	()	(1)	()	()	()	()	()	()	(1)	(0.7)
	機械製造業	()	()	()	()	()	()	2	()	()	()	()	()	()	2	0.3
		()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()
電気機械器具 製造業	1	()	()	()	()	8	9	()	()	()	()	()	()	18	3.0	
	()	()	()	()	()	()	(1)	()	()	()	()	()	()	(1)	(0.7)	
輸送用機械器 具製造業	()	()	()	()	()	2	6	()	()	()	()	()	()	8	1.4	
	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	
光学時計測 器・医療機械 製造業	()	()	()	()	()	()	4	()	()	()	()	()	()	4	0.7	
	()	()	()	()	()	()	(2)	()	()	()	()	()	()	(2)	(1.4)	
その他の製造 業	()	()	()	()	3	()	1	2	()	()	()	()	()	6	1.0	
	()	()	()	()	(1)	()	()	(1)	()	()	()	()	()	(2)	(1.4)	
小 計	1	()	()	()	4	17	34	11	2	()	16	()	()	85	14.4	
	()	()	()	()	(1)	(2)	(7)	(3)	()	()	(2)	()	()	(15)	(10.3)	
卸売・小売業	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	
金融・保険・不動 産業	1	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	1	2	0.3	
	(1)	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	(1)	(0.7)	
運輸・通信・電 気・ガス・水道業	()	()	()	()	2	()	6	()	()	()	()	()	1	9	1.5	
	()	()	()	()	(1)	()	()	()	()	()	()	()	()	(1)	(0.7)	
サービス業	()	()	1	2	13	5	15	17	4	()	1	()	()	58	9.8	
	()	()	()	()	(4)	()	(1)	(7)	()	()	()	()	()	(12)	(8.2)	
教 育	58	4	7	17	34	21	29	12	5	5	1	2	4	199	33.7	
	(23)	()	(2)	(2)	(10)	(5)	(2)	(5)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(54)	(37.0)	
公 務	6	()	()	1	4	3	14	3	1	86	()	2	()	120	20.3	
	(5)	()	()	()	(1)	()	(2)	(2)	()	(26)	()	(1)	()	(37)	(25.3)	
公共企業体	()	()	()	()	()	27	()	()	()	3	()	()	()	30	5.1	
	()	()	()	()	()	(3)	()	()	()	(1)	()	()	()	(4)	(2.7)	
その他	6	5	()	7	3	2	19	()	()	27	9	()	1	79	13.4	
	(2)	(2)	()	(1)	()	()	(2)	()	()	(5)	(8)	()	()	(20)	(13.7)	
合 計	72	9	8	27	60	77	123	44	12	121	10	21	7	591	100	
	(31)	(2)	(2)	(3)	(17)	(10)	(15)	(18)	(1)	(33)	(9)	(4)	(1)	(146)	(100)	

注：()内数字は、女子学生数を内数でしめたものである。

平成 14年度 学部卒業者の企業規模別就職状況

[平成15年5月1日現在]

[単位：人]

学部別 規模別等		法学部	経済学部	文学部	教育学部	教養学部	理学部	工学部	農学部		医学部		薬学部	合 計
									農学	獣医	医学	健康・看護		
大企業	人数	186 (25)	203 (24)	141 (52)	26 (11)	36 (11)	14 ()	90 (2)	24 (5)	4 (1)		1 (1)	1 (1)	726 (133)
	割合	52.8 [52.1]	57.7 [50.0]	40.1 [70.3]	7.4 [22.9]	10.2 [22.9]	4.0 []	25.6 [4.2]	6.8 [10.4]	1.1 [2.1]		0.3 [2.1]	0.3 [2.1]	65.8 [62.7]
中企業	人数		7 (1)	24 (8)	4 (2)	5 ()		7 ()	3 (1)					50 (12)
	割合		2.0 [2.1]	6.8 [16.7]	1.1 [4.2]	1.4 []		2.0 []	0.9 [2.1]					4.5 [5.7]
小企業	人数		7 ()	11 (3)	3 ()	1 ()		10 (2)	6 ()	3 (1)				41 (6)
	割合		2.0 []	3.1 [6.3]	0.9 []	0.3 []		2.8 [4.2]	1.7 []	0.9 [2.1]				3.7 [2.8]
教育	人数		1 (1)	7 (2)	1 (1)	2 ()			1 (1)					12 (5)
	割合		0.3 [2.1]	2.0 [4.2]	0.3 [2.1]	0.6 []			0.3 [2.1]					1.1 [2.4]
公務	人数	108 (10)	34 (9)	20 (7)	9 (5)	8 (3)	2 ()	8 (3)	4 ()	1 (1)				194 (38)
	割合	30.7 [20.8]	9.7 [18.8]	5.7 [14.6]	2.6 [10.4]	2.3 [6.3]	0.6 []	2.3 [6.3]	1.1 []	0.3 [2.1]				17.6 [17.9]
公共企業体	人数					2 ()	2 ()							4 ()
	割合					0.6 []	0.6 []							0.4 []
その他	人数	58 (13)	2 ()	7 (2)	2 ()			2 ()				5 (3)		76 (18)
	割合	16.5 [27.1]	0.6 []	2.0 [4.2]	0.6 []			0.6 []				1.4 [6.3]		6.9 [8.5]
合 計	人数	352 (48)	254 (35)	210 (74)	45 (19)	54 (14)	18 ()	117 (7)	38 (7)	8 (3)		6 (4)	1 (1)	1103 (212)
	割合	100 [100]	100 [100]	100 [100]	100 [100]	100 [100]	100 []	100 [100]	100 [100]	100 [100]		100 [100]	100 [100]	100 [100]

注1：()内数字は女子学生数を内数で、[]内数字は女子学生における割合をしめしたものである。

注2：大企業は従業員数500人以上、中企業は従業員数100～499人、小企業は99人以下とした。

平成 14年度 修士課程修了者の企業規模別就職状況

[平成15年5月1日現在]

[単位：人]

研究科別 規模別等	人文社会 系	教育学	法学政治 学	経済学	総合文化	理学系	工学系	農学生命 科学農学	医学系		薬学系	数理科学	新領域創 成科学	学際情報 学府	情報理工 学系	合 計
									医学	保健学						
大 企 業	人数 (4)	1 ()	26 (4)	13 (1)	51 (18)	112 (24)	483 (54)	102 (32)	1 (1)	4 (2)	24 (12)	9 (1)	153 (31)	5 (2)	88 (3)	1084 (189)
	割合 [30.8]	12.5 []	53.1 [26.7]	61.9 [33.3]	82.3 [100.0]	85.5 [82.8]	88.0 [93.1]	67.5 [54.2]	33.3 [100.0]	44.4 [40.0]	80.0 [75.0]	60.0 [100.0]	76.5 [72.1]	31.3 [25.0]	90.7 [100.0]	# 79.2 [68.2]
中 企 業	人数 ()		2 ()	2 (1)				19 (9)				2 ()	13 (5)	4 (2)	1 ()	44 (17)
	割合 []	3.7 []	4.1 []	9.5 [33.3]				12.6 [15.3]				13.3 []	6.5 [11.6]	25.0 [25.0]	1.0 []	3.2 [6.1]
小 企 業	人数 (1)		4 (2)					11 (9)					4 ()	4 (3)	2 ()	26 (15)
	割合 [7.7]	3.7 []	8.2 [13.3]					7.3 [15.3]					2.0 []	25.0 [37.5]	2.1 []	1.9 [5.4]
教 育	人数 (3)	1 (1)			4 (1)		4 ()	2 (2)		1 ()	1 (1)	2 ()		1 ()		21 (8)
	割合 [23.1]	12.5 [20.0]			6.5 [5.6]		0.7 []	1.3 [3.4]		11.1 []	3.3 [6.3]	13.3 []		6.3 []		1.5 [2.9]
公 務	人数 (2)	1 ()	13 (5)	4 ()	3 (2)	13 (3)	39 (2)	14 (5)	1 ()		5 (3)	2 ()	11 ()	2 (1)	6 ()	118 (23)
	割合 [15.4]	12.5 []	26.5 [33.3]	19.0 []	4.8 [11.1]	9.9 [10.3]	7.1 [3.4]	9.3 [8.5]	33.3 []		16.7 [18.8]	13.3 []	5.5 []	12.5 [12.5]	6.2 []	8.6 [8.3]
公共企業体	人数 ()					1 (1)										1 (1)
	割合 []					0.8 [3.4]										0.1 [0.4]
そ の 他	人数 (3)	5 (4)	4 (4)	2 (1)	4 (2)	5 (1)	23 (2)	3 (2)	1 ()	4 (3)			19 (7)			74 (29)
	割合 [23.1]	62.5 [80.0]	8.2 [26.7]	9.5 [33.3]	6.5 [11.1]	3.8 [3.4]	4.2 [3.4]	2.0 [3.4]	33.3 []	44.4 [60.0]			9.5 [16.3]			5.4 [10.5]
合 計	人数 (13)	8 (5)	49 (15)	21 (3)	62 (18)	131 (29)	549 (58)	151 (59)	3 (1)	9 (5)	30 (16)	15 (1)	200 (43)	16 (8)	97 (3)	1368 (277)
	割合 [100]	100 [100]	100 [100]	100 [100]	100 [100]	100 [100]	100 [100]	100 [100]	100 [100]	100 [100]	100 [100]	100 [100]	100 [100]	100 [100]	100 [100]	100 [100]

注1：()内数字は女子学生数を内数で、[]内数字は女子学生における割合をしめたものである。

注2：大企業は従業員数500人以上、中企業は従業員数100～499人、小企業は99人以下とした。

平成 14年度 博士課程修了者の企業規模別就職状況

[平成15年5月1日現在]

[単位：人]

研究科別 規模別等	人文社会 系	教育学	法学政治 学	経済学	総合文化	理学系	工学系	農学生命科学		医学系		薬学系	数理科学	新領域創 成科学	合 計
								農学	獣医	医学	保健学				
大企業	人数 (1)	()	1 ()	2 ()	19 (6)	24 (2)	61 (9)	28 (10)	4 ()	()	()	16 (2)	2 ()	()	159 (30)
	割合 [3.2]	[]	[]	[]	[35.3]	[20.0]	[60.0]	[55.6]	[]	[]	[]	[50.0]	[]	[]	[20.5]
中企業	人数 ()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()
	割合 []	[]	[]	[]	[]	[]	[]	[]	[]	[]	[]	[]	[]	[]	[]
小企業	人数 ()	()	()	()	()	()	()	1 (1)	2 ()	()	()	1 ()	()	()	4 (1)
	割合 []	[]	[]	[]	[]	[]	[]	[5.6]	[16.7]	[]	[]	[4.8]	[]	[]	[0.7]
教育	人数 (23)	4 ()	7 (2)	17 (2)	34 (10)	21 (5)	29 (2)	12 (5)	5 (1)	5 (1)	1 (1)	2 (1)	4 (1)	()	199 (54)
	割合 [74.2]	[44.4]	[87.5]	[63.0]	[66.7]	[58.8]	[50.0]	[27.8]	[41.7]	[4.1]	[10.0]	[9.5]	[57.1]	[]	[37.0]
公務	人数 (5)	()	()	1 ()	4 (1)	3 ()	14 (2)	3 (2)	1 ()	86 (26)	()	2 (1)	()	()	120 (37)
	割合 [16.1]	[]	[]	[]	[5.9]	[]	[13.3]	[11.1]	[]	[78.8]	[]	[25.0]	[]	[]	[25.3]
公共企業体	人数 ()	()	()	()	()	27 (3)	()	()	()	3 (1)	()	()	()	()	30 (4)
	割合 []	[]	[]	[]	[]	[30.0]	[]	[]	[]	[3.0]	[]	[]	[]	[]	[2.7]
その他	人数 (2)	5 (2)	()	7 (1)	3 ()	2 ()	19 (2)	()	()	27 (5)	9 (8)	()	1 ()	()	79 (20)
	割合 [6.5]	[55.6]	[]	[25.9]	[5.0]	[2.6]	[13.3]	[]	[]	[22.3]	[90.0]	[]	[14.3]	[]	[13.7]
合 計	人数 (31)	9 (2)	8 (2)	27 (3)	60 (17)	77 (10)	123 (15)	44 (18)	12 (1)	121 (33)	10 (9)	21 (4)	7 (1)	()	591 (146)
	割合 [100]	[100]	[100]	[100]	[100]	[100]	[100]	[100]	[100]	[100]	[100]	[100]	[100]	[]	[100]

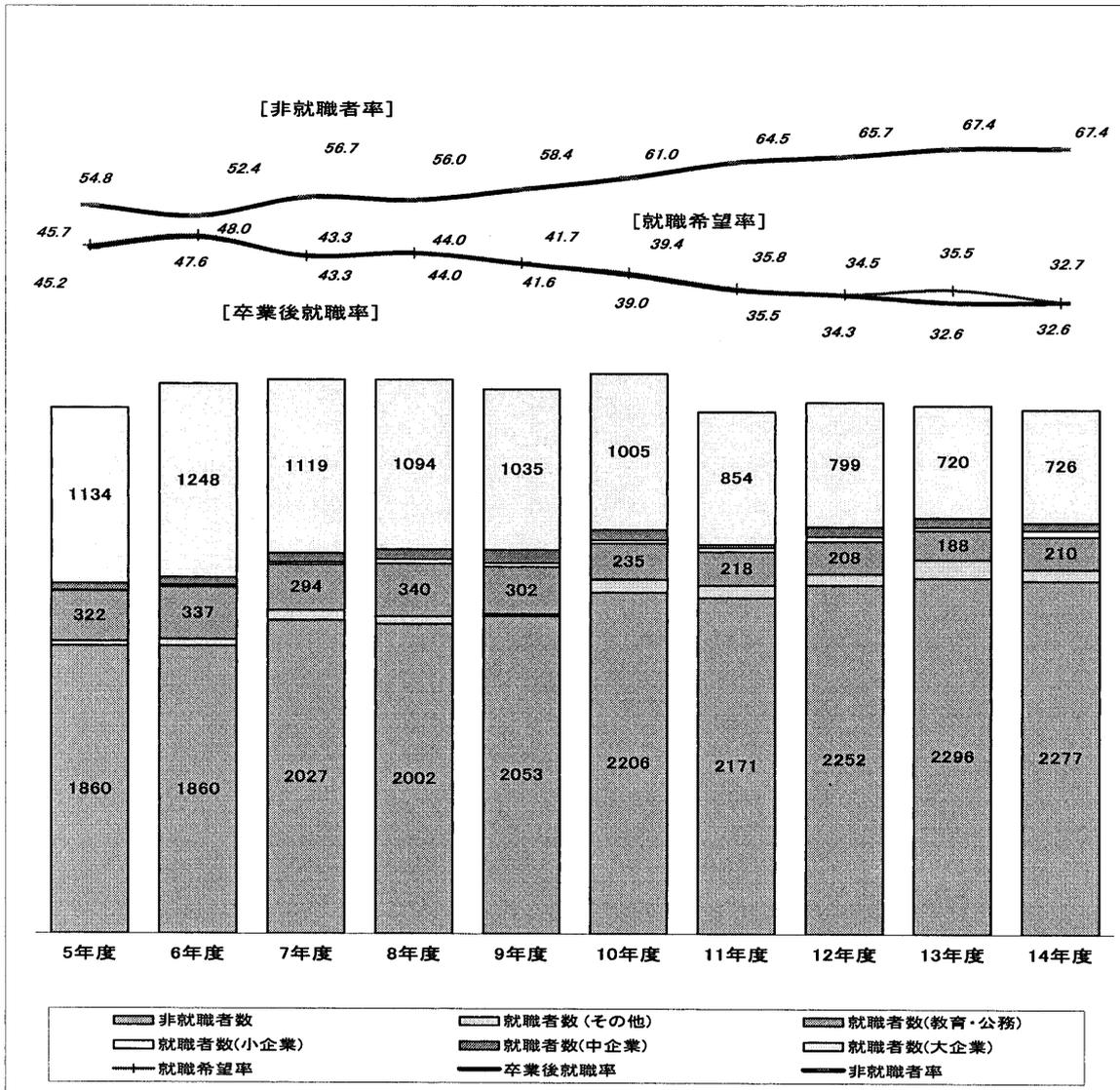
注1：()内数字は女子学生数を内数で、[]内数字は女子学生における割合をしめしたものである。

注2：大企業は従業員数500人以上、中企業は従業員数100～499人、小企業は99人以下とした。

就職状況の推移(学部学生)

1. 卒業者数等及び割合(過去10年)

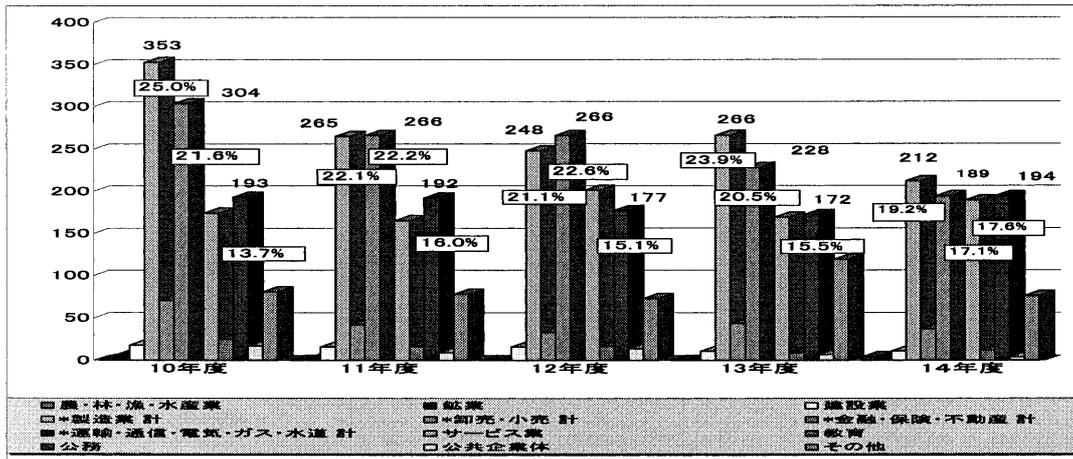
	5年度	6年度	7年度	8年度	9年度	10年度	11年度	12年度	13年度	14年度
学部卒業生数	3396	3550	3578	3576	3515	3616	3368	3428	3407	3380
就職希望者数	1552	1703	1551	1574	1465	1426	1207	1182	1209	1106
卒業就職者数	1536	1690	1551	1574	1462	1410	1197	1176	1111	1103
企業規模別等の内訳										
(大企業)	1134	1248	1119	1094	1035	1005	854	799	720	726
(中企業)	44	48	59	63	85	67	20	64	61	50
(小企業)	5	15	15	28	25	22	27	32	22	41
(教育・公務)	322	337	294	340	302	235	218	208	188	210
(その他)	31	42	64	49	15	81	78	73	119	76
その他数(非就職者)	1860	1860	2027	2002	2053	2206	2171	2252	2296	2277
就職希望率	45.7	48.0	43.3	44.0	41.7	39.4	35.8	34.5	35.5	32.7
卒業就職率	45.2	47.6	43.3	44.0	41.6	39.0	35.5	34.3	32.6	32.6
企業規模別等の割合										
(大企業)	73.8	73.8	72.1	69.5	70.8	71.3	71.3	67.9	64.8	65.8
(中企業)	2.9	2.8	3.8	4.0	5.8	4.8	1.7	5.4	5.5	4.5
(小企業)	0.3	0.9	1.0	1.8	1.7	1.6	2.3	2.7	2.0	3.7
(教育・公務)	21.0	19.9	19.0	21.6	20.7	16.7	18.2	17.7	16.9	19.0
(その他)	2.0	2.5	4.1	3.1	1.0	5.7	6.5	6.2	10.7	6.9
その他率(非就職者)	54.8	52.4	56.7	56.0	58.4	61.0	64.5	65.7	67.4	67.4



就職状況の推移(学部学生)

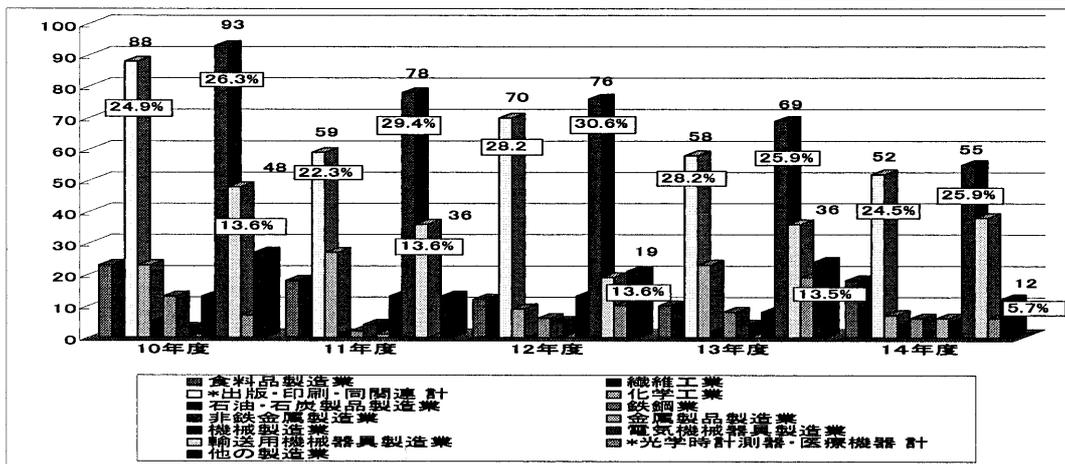
2.産業別就職状況の推移・全産業別(過去5年)

	10年度	11年度	12年度	13年度	14年度
農・林・漁・水産業	1	0	0	0	4
鉱業	6	2	0	1	3
建設業	18	16	16	11	11
*製造業計	353	265	248	266	212
*卸売・小売計	71	42	33	44	37
*金融・保険・不動産計	304	266	266	228	194
*運輸・通信・電気・ガス・水道計	167	145	131	85	167
サービス業	174	165	201	169	189
教育	25	17	17	9	12
公務	193	192	177	172	194
公共企業体	17	9	14	7	4
その他	81	78	73	119	76



3.産業別就職状況の推移・製造業の内訳(過去5年)

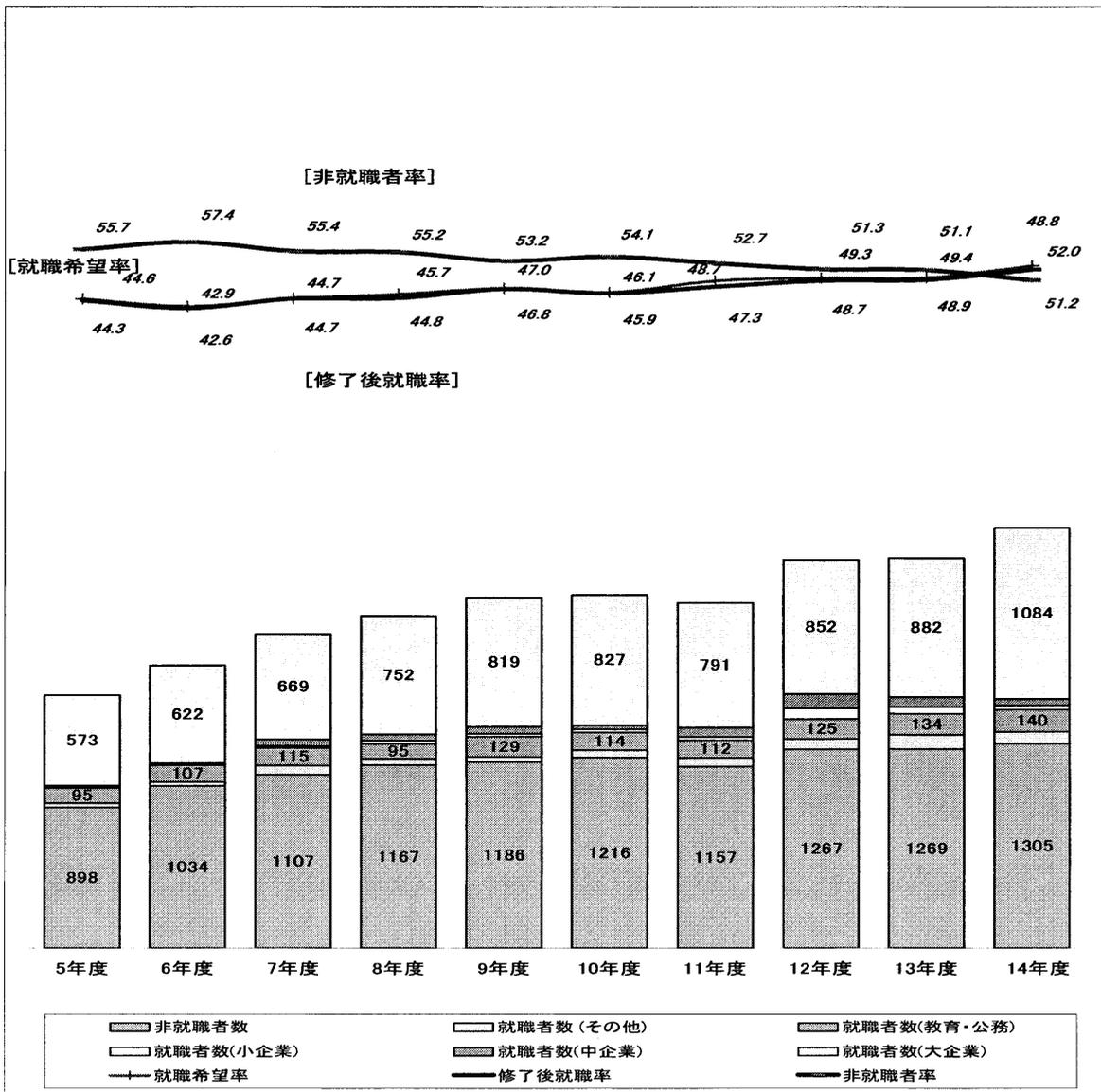
	10年度	11年度	12年度	13年度	14年度
食料品製造業	23	18	12	10	18
繊維工業	10	13	7	5	2
*出版・印刷・同関連計	88	59	70	58	52
化学工業	23	27	9	23	7
石油・石炭製品製造業	5	1	0	2	4
鉄鋼業	13	2	6	8	6
非鉄金属製造業	3	4	5	4	1
金属製品製造業	0	1	0	0	6
機械製造業	13	13	13	8	5
電気機械器具製造業	93	78	76	69	55
輸送用機械器具製造業	48	36	19	36	38
*光学時計測器・医療機器計	7	0	10	19	6
他の製造業	27	13	21	24	12
*製造業計	353	265	248	266	212



就職状況の推移(大学院修士課程)

1.課程修了者数等及び割合(過去10年)

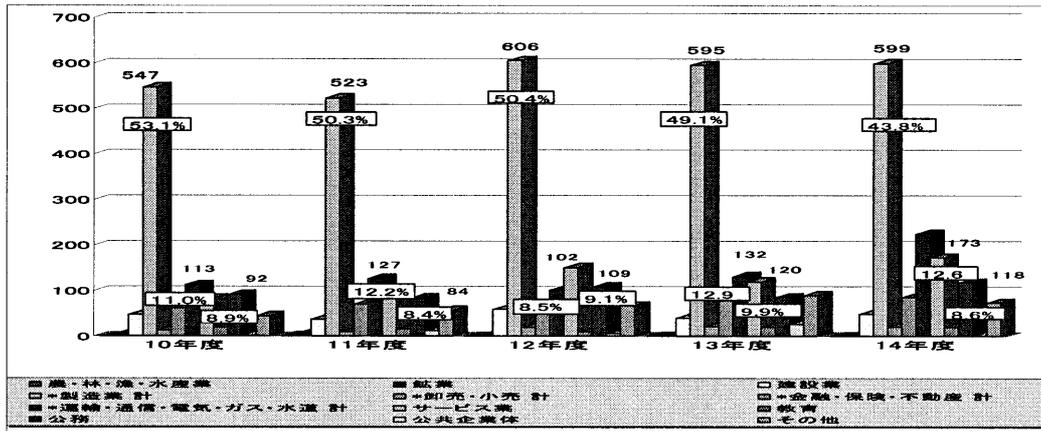
	5年度	6年度	7年度	8年度	9年度	10年度	11年度	12年度	13年度	14年度
課程修了者数	1611	1800	2000	2115	2231	2247	2197	2470	2482	2673
就職希望者数	719	773	893	966	1049	1035	1069	1217	1227	1390
修了後就職者数	713	766	893	948	1045	1031	1040	1203	1213	1368
企業規模別等の内訳										
(大企業)	573	622	669	752	819	827	791	852	882	1084
(中企業)	14	8	43	40	45	25	59	92	65	44
(小企業)	3	4	10	21	19	20	21	67	42	26
(教育・公務)	95	107	115	95	129	114	112	125	134	140
(その他)	28	25	56	40	33	45	57	67	90	74
その他数(非就職者)	898	1034	1107	1167	1186	1216	1157	1267	1269	1305
就職希望率	44.6	42.9	44.7	45.7	47.0	46.1	48.7	49.3	49.4	52.0
修了後就職率	44.3	42.6	44.7	44.8	46.8	45.9	47.3	48.7	48.9	51.2
企業規模別等の割合										
(大企業)	80.4	81.2	74.9	79.3	78.4	80.2	76.1	70.8	72.7	79.2
(中企業)	2.0	1.0	4.8	4.2	4.3	2.4	5.7	7.6	5.4	3.2
(小企業)	0.4	0.5	1.1	2.2	1.8	1.9	2.0	5.6	3.5	1.9
(教育・公務)	13.3	14.0	12.9	10.0	12.3	11.1	10.8	10.4	11.0	10.2
(その他)	3.9	3.3	6.3	4.2	3.2	4.4	5.5	5.6	7.4	5.4
その他率(非就職者)	55.7	57.4	55.4	55.2	53.2	54.1	52.7	51.3	51.1	48.8



就職状況の推移(大学院修士課程)

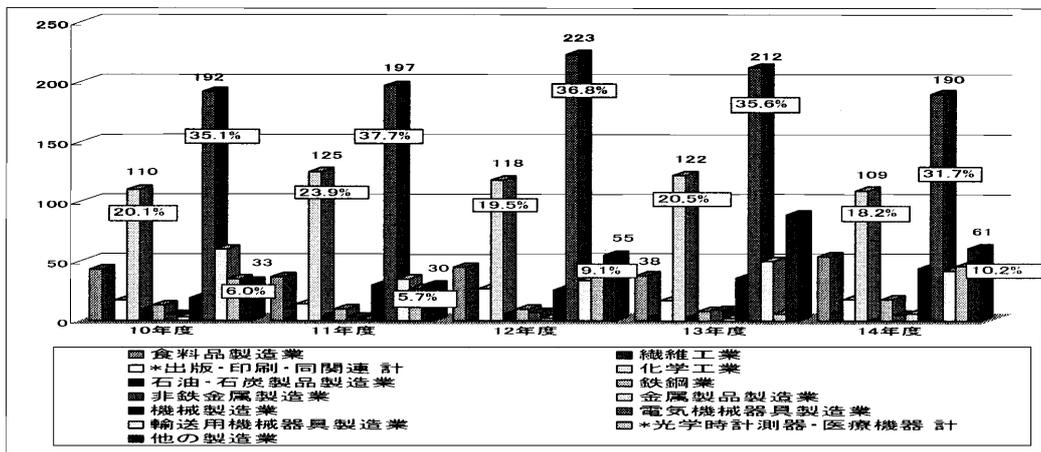
2.産業別就職状況の推移・全産業別(過去5年)

	10年度	11年度	12年度	13年度	14年度
農・林・漁・水産業	0	1	0	0	0
鉱業	5	6	2	1	1
建設業	48	38	60	40	49
*製造業計	547	523	606	595	599
*卸売・小売計	14	10	20	22	21
*金融・保険・不動産計	62	71	70	79	86
*運輸・通信・電気・ガス・水道計	113	127	102	132	225
サービス業	83	95	151	120	173
教育	20	16	10	21	21
公務	92	84	109	86	118
公共企業体	2	12	6	27	1
その他	45	57	67	90	74



3.産業別就職状況の推移・製造業の内訳(過去5年)

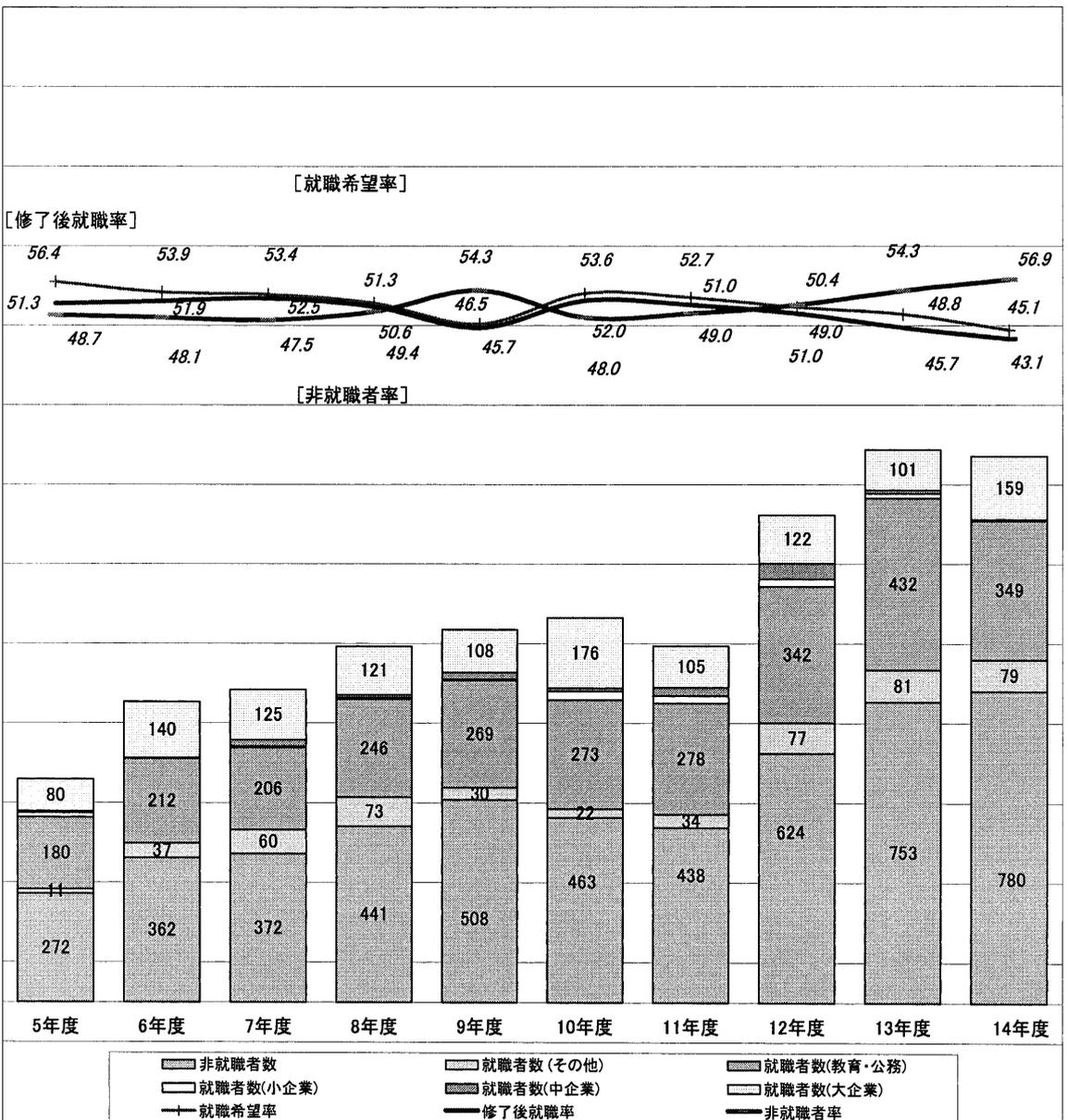
	10年度	11年度	12年度	13年度	14年度
食品製造業	43	37	45	38	54
繊維工業	8	10	14	3	6
*出版・印刷・同関連計	17	14	27	17	18
化学工業	110	125	118	122	109
石油・石炭製品製造業	9	4	6	3	0
鉄鋼業	13	10	10	8	18
非鉄金属製造業	5	3	7	9	5
金属製品製造業	3	1	2	2	6
機械製造業	19	30	26	36	44
電気機械器具製造業	192	197	223	212	190
輸送用機械器具製造業	60	35	34	50	42
*光学時計測器・医療機器計	35	27	39	6	46
他の製造業	33	30	55	89	61
*製造業計	547	523	606	595	599



就職状況の推移(大学院博士課程)

1.課程修了者数等及び割合(過去10年)

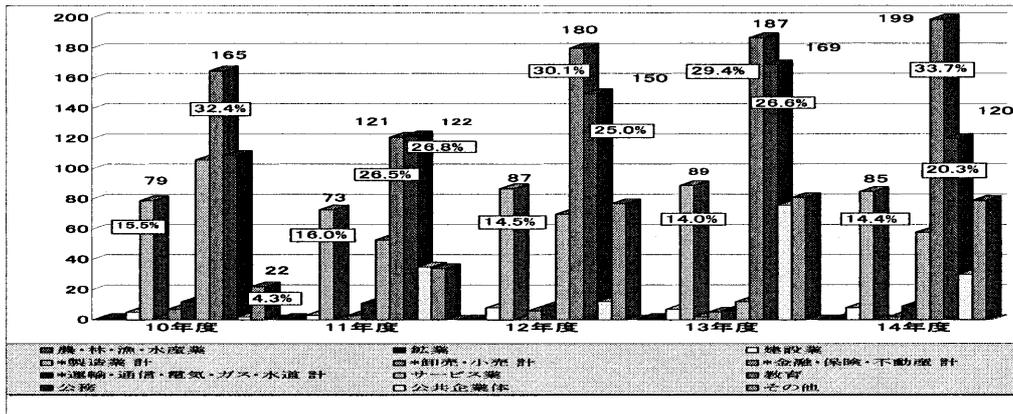
	5年度	6年度	7年度	8年度	9年度	10年度	11年度	12年度	13年度	14年度
課程修了者数	559	753	783	892	935	964	894	1223	1388	1371
就職希望者数	315	406	418	458	435	517	471	617	677	619
修了後就職者数	287	391	411	451	427	501	456	599	635	591
企業規模別等の内訳										
(大企業)	80	140	125	121	108	176	105	122	101	159
(中企業)	5	1	17	7	17	8	21	39	9	0
(小企業)	11	1	3	4	3	22	18	19	12	4
(教育・公務)	180	212	206	246	269	273	278	342	432	349
(その他)	11	37	60	73	30	22	34	77	81	79
その他数(非就職者)	272	362	372	441	508	463	438	624	753	780
就職希望率	56.4	53.9	53.4	51.3	46.5	53.6	52.7	50.4	48.8	45.1
修了後就職率	51.3	51.9	52.5	50.6	45.7	52.0	49.0	49.0	45.7	43.1
企業規模別等の割合										
(大企業)	27.9	35.8	30.4	26.8	25.3	35.1	23.0	20.4	15.9	26.9
(中企業)	1.7	0.3	4.1	1.6	4.0	1.6	4.6	6.5	1.4	0.0
(小企業)	3.8	0.3	0.7	0.9	0.7	4.4	3.9	3.2	1.9	0.7
(教育・公務)	62.7	54.2	50.1	54.5	63.0	54.5	61.0	57.1	68.0	59.1
(その他)	3.8	9.5	14.6	16.2	7.0	4.4	7.5	12.9	12.8	13.4
その他率(非就職者)	48.7	48.1	47.5	49.4	54.3	48.0	51.0	51.0	54.3	56.9



就職状況の推移(大学院博士課程)

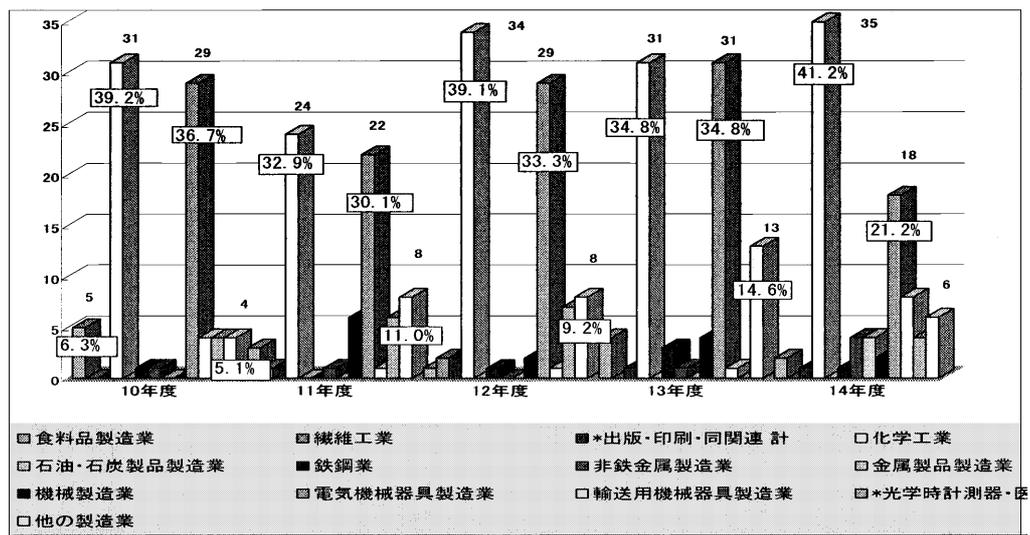
2.産業別就職状況の推移・全産業別(過去5年)

	10年度	11年度	12年度	13年度	14年度
農・林・漁・水産業	1	1	0	1	0
鉱業	0	0	0	0	1
建設業	5	3	8	7	8
*製造業計	79	73	87	89	85
*卸売・小売計	1	0	0	2	0
*金融・保険・不動産計	7	3	6	5	2
*運輸・通信・電気・ガス・水道計	12	11	9	6	9
サービス業	106	53	70	12	58
教育	165	121	180	187	199
公務	109	122	150	169	120
公共企業体	2	35	12	76	30
その他	22	34	77	81	79



3.産業別就職状況の推移・製造業の内訳(過去5年)

	10年度	11年度	12年度	13年度	14年度
食料品製造業	5	3	1	4	2
繊維工業	0	1	2	0	0
*出版・印刷・同関連計	0	1	2	1	1
化学工業	31	24	34	31	35
石油・石炭製品製造業	0	0	0	0	0
鉄鋼業	1	0	1	3	1
非鉄金属製造業	1	1	0	1	4
金属製品製造業	0	0	0	0	4
機械製造業	0	6	2	4	2
電気機械器具製造業	29	22	29	31	18
輸送用機械器具製造業	4	1	1	1	8
*光学時計測器・医療機器計	4	6	7	0	4
他の製造業	4	8	8	13	6
*製造業計	79	73	87	89	85



学生のアルバイト及びアパート・下宿等の紹介状況

学生部厚生課では、本郷地区に在学している学部学生、大学院生、留学生及び研究生に対して、アルバイト及びアパート・下宿等の紹介を行っており、その状況は以下のとおりである。

◆アルバイトの紹介状況（平成14年度）

1. 紹介状況

区 分	受付件数	求人数	応募者数		採用者数	
				うち 留学生数		うち 留学生数
家庭教師	131	135	156		95	
塾講師	215	1216	643		157	
臨時アルバイト	287	2362	806	54	353	9
合 計	633	3713	1605	54	605	9

2. 応募学生の採用内訳

区 分		学部学生	大学院学生	研究生
家庭教師	応募数	96	60	0
	採用数	56	39	0
塾講師	応募数	362	281	0
	採用数	88	69	0
臨時アルバイト	応募数	493	313	0
	採用数	227	126	0
合 計	応募数	951	654	0
	採用数	371	234	0

3. 家庭教師依頼先の学年別内訳

対象生徒学年	受付件数	応募者数	採用者数
小学3年以下	0	0	0
小学4年～小学6年	20	20	14
中学1年～中学3年	34	39	28
高校1年～高校3年	54	74	40
浪人生	11	12	7
大学生	7	7	4
社会人	5	4	2
合 計	131	156	95

4. 臨時アルバイト・依頼業務分類

業 務 内 容	件 数
コンピューター関係(インターネット、プログラム関係)	84
事務全般	25
採点、添削、校正、問題(教材)作成	64
軽作業(物品の運搬、ポストイン等)	18
調査、研究、分析等	10
イベント、キャンペーン等スタッフ	20
業務関連スタッフ	29
飲食関係	20
翻訳	4
医療、介護関係	7
個人又は業務指導、講師等	6
受付・管理業務	0
販売関係	0
上記以外	0
合 計	287

<アルバイトの応募について>

1. 学生部センター(安田講堂北側1階)内にアルバイト紹介の掲示板があります。「学生証」を持参(外国人留学生の方は、資格外活動許可書も持参)のうえ、希望するアルバイトの番号を学生生活掛(窓口3)に申し出てください。紹介状を発行いたします。
 2. 紹介手続き後は求人先に直接連絡し、紹介状を持参のうえ面接(または選考試験)を受けてください。
 3. 結果については採用・不採用にかかわらず、学生生活掛(窓口3)まで必ず報告してください。
- (注意) アルバイトに応募する時は、仕事内容を確認して、学業に支障をきたすことのないようにしてください。また、成立したアルバイトは責任をもって行ってください。

◆アパート・下宿等の紹介状況（平成14年度）

1. 紹介状況

年 月	受付件数	紹介件数	うち 留学生数	成立件数	うち 留学生数
平成14年 4月	54	38	12	7	1
5月	42	41	12	9	4
6月	35	28	4	6	1
7月	38	25	10	7	1
8月	28	28	16	5	2
9月	57	42	13	10	2
10月	41	36	14	7	1
11月	40	41	9	9	2
12月	42	49	10	9	1
平成15年 1月	85	132	45	17	4
2月	128	139	38	31	8
3月	120	83	15	20	3
合 計	710	682	198	137	30

2. 紹介状況年度別推移

年 度	受付件数		紹介件数		成立件数	
		うち 留学生数		うち 留学生数		うち 留学生数
9	1,047	324	911	134	188	32
10	792	224	911	134	188	32
11	823	259	954	154	208	34
12	799	254	921	157	182	28
13	711	263	757	166	176	43
14	710	270	682	195	137	30

3. 成立物件の家賃別順位

順 位	金 額 (円)	件 数
1	20,000～30,000	41
2	30,001～40,000	20
3	50,001～60,000	17
4	70,001～80,000	14
5	60,001～70,000	12
6	40,001～50,000	11
7	20,000以下	8
8	80,000～90,000	6
9	90,001～100,000	5
10	100,000	3
合 計		137

4. 紹介希望者別内訳

区 分	紹介件数	成立件数
学部学生	327	67
大学院生	355	70
研究生	0	0
上記以外	0	0
合 計	682	137

5. 成立物件の間取り別順位

順 位	間取り、設備等	件 数
1	1～2部屋、台所、バス、トイレ	59
2	1～2部屋、台所、トイレ	57
3	ワンルームマンション形式	9
4	1～2部屋、台所（専用）	7
5	1部屋（他の設備は共用）	5
合 計		137

6. 成立物件の地区別順位

順 位	地 区 別	件 数
1	文京区	92
2	北区	15
3	足立区	10
4	豊島区	7
5	練馬区	4
	葛飾区	2
	その他	7
合 計		137

<アパート・下宿等の紹介について>

1. 学生部センター（安田講堂北側1階）内にアパート・下宿等紹介の掲示板があります。希望する物件がありましたら「学生証」を持参のうえ、学生生活掛（窓口3）に申し出てください。紹介状を発行いたします。
2. 紹介手続き後は家主に直接連絡し、紹介物件の下見をした上で、家主と話し合っ決めてください。
3. 結果については、成立・不成立にかかわらず、紹介後1週間以内に学生生活掛（窓口3）まで必ず報告してください。

(学生部)

事務職員海外研修報告

本学では、全学協力基金により国際交流に熱意のある事務職員を長期間海外に派遣する研修制度をもっているが、平成14年にこのプログラムで派遣した3名から研修についての報告書が提出されたので供覧するとともに、今後、当制度での海外研修を目指す人々の参考としたい。

在外研修（長期）を終えて

教養学部等教務課前期課程第二掛
延 原 和 志
(カリフォルニア大学デイヴィス校)

1. はじめに

私は、「東京大学国際交流担当職員在外研修（長期）」のため2002年3月25日から2003年3月21日までの約1年間米国カリフォルニア州デイヴィスに滞在する機会をいただきました。研修内容は1年間にわたる語学研修（実務研修期間中は1日に1コマの授業のみ）と最後の3ヶ月間の実務研修で構成されていました。以下、その内容と私なりに感じたことを報告したいと思います。

2. デイヴィス

デイヴィスはカリフォルニア州の北部にあり、州都であるサクラメントから西に車で約30分、サンフランシスコへも1時間半程度で行くことができる郊外の小さな大学町である。人口は約6万人程度で、カリフォルニア大学デイヴィス校（以下UCD）の構内を含め、街には高い建物がほとんど無く、広々として落ち着いた雰囲気だった。カリフォルニアというイメージから渡米前は温暖で穏やかな気候を予想していたが、実際は、夏は雨がほとんど無く乾燥していて気温も40度を越える日もあり、逆に冬は雨が多く太陽が恋しくなるほどで極端な気候だった。しかし夏でも夜は涼しく、冬も東京の寒さに比べれば暖かったため今にして思えば居心地が良かった気がする。

アメリカは車社会だとは聞いていたが、実際デイヴィスの町には公共交通機関はバスしかなく、学生は大半が自転車かバスで通学していた。私も1年間ずっと天候に関係なく自転車で通ったが、これほど自転車が街中を行き交っている町はあちらでは珍しいということだった。そんな町に住んでいても遠くに出かけるには車が無いと非常に不便で、やはり車社会というのは本当であった。街の中心街はとても小さいが、その他に大小のモールが点在しているので、普段の買い物には困らなかった。ただ娯楽施設はあまり無いため、退屈なつまらない街だと感じている学生も多いようだった。治安は大変よく、主な犯罪は自転車泥棒ぐらいで、夜に女性が一人でジョギングをしているのを見て大変驚いたこともあった。また想像以上にアジア系米国人が多く、UCDの学生構成も

最近白人系を抜いてアジア系が多くなったということで、キャンパス内でも街中でも自分が外国人であるという事を意識することは少なかった。とても落ち着いた環境で、勉強をするには恵まれた環境だという私の第一印象は1年間を通して変わることは無かった。

私は大学から15分くらいのところでホームステイをした。ホストマザーは一人暮らしの78歳の女性で、数年前から留学生を受け入れ始めたらしく、特に日本人はこれまでに何人も滞在したということであった。高齢なので家事を手伝ってほしいという意味もあって留学生を受け入れているようだったが、私も気持ち良く滞在したかったので積極的に手伝い、自分の身の回りのことは自分でやるようにしていた。家には少し意外だったのだが白米やしょうゆなども置いてあり、比較的日本の食事に近いものを提供してくださったのでありがたかった。食事の時間は貴重な会話の時間なのでなるべく喋るようにしていたが、毎日二人きりだと話題も少なくなり、何を話そうか困る日々が続いたこともあった。とても信仰心の厚い方で日本の宗教や私自身の宗教観の話になることもあったが、英語力の問題や自分自身の宗教に対する関心の薄さもあり言葉に窮することもしばしばだった。

ただ、家族や友人との会合によく誘ってくださったので、学校の宿題等で忙しくない限りなるべく参加するようにした。初めのうちはネイティブスピーカー同士の会話はほとんど聞き取れず、疎外感を感じることも多かったが、親戚同士のパーティやお孫さんの学校行事、教会の日曜礼拝等アメリカ人の生活を垣間見ることができ、貴重な機会であったと思う。

3. 語学研修

到着直後の3月28日から今年の3月14日まで4学期に渡り、UCD附属のUCDエクステンションセンターで英語語学プログラムを受講した。最後の学期は実務研修もあったため、1日1コマの授業だけであったが、最初の3学期間は毎日4～5コマの授業を受けていた。授業内容は、発音練習やリスニング、文法、英作文と言った一般的なものから、アメリカンスラング・イデオムの授業、PowerPointを使ってプレゼンテーションのスキルを学ぶ授業等様々であった。

その中で一番印象に残っている授業は、アメリカ現代社会の様々な問題について討論する授業である。この授業は、人種、性、貧困、学校教育、家族等々米国が抱える様々な社会問題について書かれた教科書を使い討論をするという授業だった。毎日読書の宿題が出て、その内容について次の日に討論をするのだが、UCDの正規の大学生が使う教科書と同じものを使っているため内容も難しく、平均10数ページもあるため、初めのうちはこの授業の宿題だけでかなりの時間を費やした。しかも辞書を一切使うなどと言われているため、内容が良くわからないまま討論に臨むということも初めは多かった。討論中は、先生が「それは何故?」「どういう方法で?」というようにかなり突っ込んだ質問をしてくるので、それに

対して即座にきちんとまとまった意見を言わなければならず、授業中は緊張の連続だった。昔から日本の教育は知識偏重で、「なぜ?」「どうして?」という自分の頭で考えさせる力が伸びないと言われるが、その当否はともかく、少なくとも自分自身の学生生活を振り返るとやはりそうだったのかなと改めて感じた。(実際、日本語でもその質問には即座に返答できないと思うことが度々あった。) また、私も含め全般的に日本の学生はなかなか自分から発言せず、発言も発音や文法を気にしながらたどたどしく話すのだが、南米や中東などからの学生は文法や発音などは気にせず、時には内容的にも少しずれているのではと思うことまで、とにかく単語を並べてべらべらと話すのは印象的だった。彼らの母国語と英語とが比較的似ているためだとか、文化の違いだと言ってしまえばそれまでかもしれないが、外国語を習得する際には彼らのような姿勢で臨むことも非常に大切なことであると感じた。ただ、早い段階からそれが自分の課題であると気付いたのだが、頭ではわかっているにもかかわらず実行するのはなかなか難しく、この研修期間中に私がそれを完全に克服できたかと言われるとそれほど自信が無い。しかし、この授業は論理的に物事を考え、それを自分の言葉で他の人に判り易く伝えるという訓練になったという意味で貴重な経験であったと思う。

論理的に物事を考えそれを人に伝えると言う意味では、英作文の授業と様々な授業で行った大小のプレゼンテーションも非常に勉強になった。英作文の授業では、いくら文法的に正しく美しい文章を並べても論理の筋道がきちんと通っていないと良い評価はもらえない。それはプレゼンテーションも同様で、いかに簡潔にしかも無味乾燥にならないように発表内容を聞き手に伝えるかと言うことに非常に神経を使った。作文やプレゼンテーションの準備は時間がかけられるので、討論でその場で意見を言うことに比べればその点は楽だったが、その分時間も費やした。特に文を書くことは昔から日本語でも非常に時間がかかる性質だったので苦勞した。いつも目の前の課題をこなすのに必死で、ホストマザーにも「和志はいつも勉強している。」と言われ続けたが、帰国して冷静に考えると、その辺は少し手を抜いてもっと他の活動をした方が会話力自体はもっと伸びたのかなとも思っている。

他では、大学の日本語の授業でチューターをした。役割は無報酬のTAのようなものである。実際に授業に出て、教官のアシスタントをしたり、質問に答えたり、チュータールームで待機し、学生が質問等に来たら、指導したりという事を行った。私がチューターをしたクラスは一番初級のクラスで、学生はほとんど日本語を話せない。そのため質問にも英語で答えなければならぬし、予想外の質問をしてくるため、答えるのに四苦八苦した。日本語を母国語にしている者ならば意識せずに使っている文法も、改めて説明するとなると、きちんと系統立てて教えなければならぬため大変難しかった。いい加減には答えられないので、自分で答えられないような質問

はもちろん教官に頼ったが、日本語を英語で教えるという事は自分の語学力向上にも大いに役に立ったと思っている。

4. 実務研修

12月9日から今年の3月19日まで大学のEAP (Education Abroad Program) のオフィスで特別インターンとして実務研修を始めた。EAPはカリフォルニア大学全体で行っている留学プログラムであり、各校にこのようなオフィスがある。大まかに言えば、カリフォルニア大学の学生に対して、短期や長期で海外の大学等に行くためのプログラムを提供している部署である。EAPのプログラムは多種多様で受け入れ先は35ヶ国、約150の大学・機関等に及ぶ。期間も1クォーターから1年間のものまであり、時期も春、夏、秋といったように様々である。各校にあるオフィスは対学生の仕事で、プログラム自体をアレンジしたり海外の大学との協議にあたりたりするのは、南カリフォルニアのサンタバーバラにあるUOEAP (Universitywide Office of Education Abroad Program) というオフィスである。東京大学の事務組織で言うと事務局と各部署との関係に近いと私は理解していた。

UCDのEAPオフィスには、ディレクターが1人(地理学の教授の方が兼務している)とアドバイザーが3人、事務担当のスタッフが1人おり、その他にインターンとしてUCDの学生が常時2~3人(全部で約10人)ほど勤務している。UCDでは他のオフィスでも、このように学生スタッフを雇用しており、その数は総勢4,000人にも上る。TAとして働いている学生数と合わせると事務職員の数に匹敵するほどであり、このことは私にとって大きな驚きだった。オフィスの長が教官職であるということと併せ、同じ職場に教官、職員、学生が混在しているということは日本では考えもしなかったことだが、非常に良い関係を保って仕事をしている姿を見ると、相互理解のためにも非常に良いアイデアであると思った。

私は、相談に来る学生とアドバイザーとの面談の席に同席したり、インターネットで資料を集めたり、学生インターンと一緒に書類整理をしたりという仕事をしていた。学生とアドバイザーとの面談は最初のうちは話を聞いているだけだったが、日本から来ているインターンという興味を持ってくれる学生も多く、日本について質問されたり、また逆にこちらから質問したりということもあった。すぐに気付いたのは職員の仕事が東京大学とはかなり違うという点である。例えば、オフィス内の仕事分担は、事務的な手続きや質問、外部からの電話についてはほとんど学生インターンが処理し、アドバイザーは文字通り学生の相談に乗るだけという形である。アドバイザーと各学生との面会時間は一回約30分となっており、とても中身が濃い。各アドバイザーは自分の担当国のプログラムについては非常に詳しく、各学生の希望や専攻に合ったプログラムと一緒に検討したり、金銭的に苦しい学生については種々の奨学金(UCの奨学金から

その学生が行く国の民間の奨学金に至るまで)を紹介したりと実にきめ細かい。私も、日本留学を希望している学生に日本の奨学金をインターネットで調べて紹介したりして出来る限りお手伝いをした。驚いたのは、カリフォルニア大学のEAPにその学生に適したプログラムが無い場合、他の団体が行っている留学プログラムまで紹介していることである。米国はグローバル化への対応や異文化理解のため学生の留学に力を入れている(実際、多い大学では年間に全学生の10%以上が海外へ留学しているということだ。)が、こうしたきめの細かいサービスからも相当留学を重要視しているのだと感じた。また、各プログラムの募集が締め切られるとアドバイザーは各学生の書類に推薦順位を付けてUOEAPに送るのだが(最終的な選考は受け入れ先の大学が行う)、その順位付けも志望理由や成績等に基づいて各アドバイザーが行っているようで、職員に与えられている権限がかなり違うなと感じた。組織やシステムが全く違うので東京大学とは単純には比較できないし、各アドバイザーの主観が入ったりして良い面も悪い面もあると思うのだが、責任が伴う分それだけやりがいもありそうで少し羨ましくも感じた。

それ以外では、今年4月に行われた教職員向けの研修会の準備を手伝った。この研修会はUCDの他の教職員にEAPについての理解をより深めてもらう目的で毎年行われているものである。今年のテーマは、黒人・ヒスパニック等のマイノリティや障害者等、これまで海外に留学する機会が少なかった学生達のEAP参加についてであり、現状や今後の課題についてEAPのディレクターがプレゼンテーションを行うということであった。私はインターネット上でプレゼンテーション作成に使えるような関連記事(他大学や諸団体がどう取り組んでいるか、彼らが留学する際に障害になっているものは何か、実際の留学経験者の体験談、将来の展望等々)や各種統計を集め、ディレクターと担当のアドバイザーの方との打合せにも参加した。毎日集めた記事などを読みながら少しずつ進めたが、そういった問題に対する取り組み方について日本の現状を比較すると考えさせられることが多かった。研修会自体は4月なので、自分はその場にいることが出来なかったのが心残りである。

また、研修期間中は大小さまざまな会議に出席した。EAPのオフィスでは週に1回ずつスタッフ会議と学生インターンだけの会議を開いており、非常に会議が多いという印象を持った。スタッフ会議の内容はその時々で、学生インターンの雇用・解雇から、オフィス内の備品の買い替え、仕事の割り振り等様々だが、とても議論が活発なのにはいつも感心する。学生インターンの会議にも必ず一人はスタッフが参加しているのだが、学生インターンが日々の仕事の中で感じた問題点などを話し合っていて、いいアイデアがあればそれを汲み取るという形で、非常によい関係を保っている。会議でアイデアを出し合い皆がそれをいいと思えばとりあえずそれを実行してみても、また問題があればそれを修正したり元に戻したりす

るという事を繰り返しているようである。いかに効率よく良い仕事ができるかという事を常に考えていて、とてもいい環境だと思った。他に、実務研修が始まって間もなく北カリフォルニアのUC各校（Davis, Berkeley, Santa Cruzの3校）のEAPのスタッフが集まって情報交換や問題点等を話し合う会議がバークレー校で行われ、私も出席させていただいた。学生数が増えている一方でEAPの予算は削られているという現状にどのように対処していけばよいのかという問題から、各校がオンラインでの申し込みをどのように行っているか、オフィスのホームページをどのように管理・運営しているかといった問題、UOEAと連携のあり方等々、議題も幅広く率直な意見交換が行われていた。印象的だったのは、同じEAPのオフィスとはいえ各校のオフィスの運営（例えばアルバイトの使い方、ホームページの内容、面会に来る大量の学生の裁き方等々）はかなり異なるようで、他のオフィスがどのように仕事をしているのかについて各々が非常に関心を持っていることだ。他のオフィスが採用している方法が良いと思ったら、それを自分達のオフィスにも積極的に導入しようという姿勢に感銘を受けた。

5. 終わりに

旅行以外の目的で海外に行くことはもちろん、1年間という長期に渡って日本を離れて生活するという経験は今回が初めてであった。研修全般を通して言えば、アメリカ人だけでなく様々な国の人達と知り合えたことが私にとって貴重な財産となったと思う。出身国によって様々な英語（の訛り）があり、様々な考え方や生き方があるということは頭ではわかっているつもりだったが、それを肌で感じられることができたのは自分にとって非常に良い経験であった。渡米前は米国に行くということで米国人との交流だけを漠然とイメージしていたのだが、実際に友人になったのは他国からの留学生の方が米国人よりも私の場合は多かった。日本に居ると米国関連の情報が圧倒的に多く他国の事を忘れてしまいがちだが、そういった意味でも今回の研修は自分の視野を広げてくれたと思う。語学力だけでなく、研修中に感じた事を忘れずに、今後の職務に活かさなければならないと思っている。



送別会にて（上段左隅）

イギリスでの長期海外研修を終えて

医学部附属病院管理課総務掛
大崎 真澄
(ウォーリック大学)

1. はじめに

広々とした起伏の無い田園と羊の群れを眺めながら、ロンドンから列車で1時間半近く揺られ着いたところが、私が半年間滞在した街であるコベントリーです。イギリスの中部に位置するこの街は、人口約30万の中規模工業都市で、バーミンガムのような大都市にも近く、またコッツウォルズのような美しい田舎の丘陵地方へも車で比較的容易に行けるようなところにあります。コベントリーの駅からはイギリス特有の2階建てバスに乗り、さらに20分ほど行くと、ウォーリック大学があります。1965年に開設された新しい大学で、建物もオックスフォードやケンブリッジのように歴史のある重厚なものではなく、広大な敷地内に近代的な建物が散らばっております。キャンパス内には緑が多く、芝生の上をカモやアヒルが歩いていたり、日本では見たことのないような様々な種類の鳥を見かけました。

ここが今回、東京大学国際交流担当職員在外研修（長期）で9月末から3月末までの期間、私が語学研修を受けることとなった大学です。

2. 語学研修について

私が学んだのは、大学のCELTE（Center for English Language Teacher Education）内にあるIntensive Course in Englishで、主に修士課程に進む人やこの先仕事で英語を活用していこうという人のために、現在の英語力をより一層発達させるように組まれているものでした。クラスはアカデミッククラス（Aクラス）とビジネスクラス（Bクラス）の2つがあり、最初のオリエンテーション時に学生はどちらか好きなほうを選択できるというので、自分が現在働いているということと、ビジネス英語を学びたいということで、ビジネスクラスを選択することに決めました。授業は年間で1タームから3タームまでありますが日程の都合上、9月30日～12月7日までの1タームと1月6日～3月15日までの2タームを受講しました。

Bクラスの何人かは、このコース終了後MBAコースに進む予定であり、他にはすでにイギリスでMBAを取得済みだがもう少し語学を勉強するために来ている人もおりました。クラスメートには様々な国籍と経験を持つ学生がおり、1ターム目の最初は私達の他に日本人が1人と、中国人3人、台湾人1人、クウェート人1人で、途中で中国人1人が抜け、リビア人2人が加わり、2ターム目から台湾人とリビア人が抜け、中国人1人、タイ人1人、ベネズエラ人1人、韓国人1人が加わりました。このように若干の人数の変動はありましたが、A、Bクラスどちらも常時10人前後の生徒が在籍していました。

最初に授業を受けてみて特に感じたのが、日本とイギリスの授業風景の違いでした。というのは、彼らは、例え文法が間違っているにしても知っている英語を使って相手に言いたいことを伝えるのがとても上手く、とにかく授業中でもよくしゃべっていました。日本で自分達が受けてきた教育、特に英語に限って言えば、授業は読み書きが中心で、話す機会といえばせいぜい暗記した文章、お決まりの会話を口に出して練習する、という程度のものであったと思います。ところがここでは、わからないことがあったらその場ですぐに質問したり、又先生が教えてくれた表現を使って別の言いまわしをしてみせ、これは正しいのかどうか聞いてみたり、と授業を中断させるのは当たり前です。この雰囲気には最初はとまどいや焦りも感じましたが、何とか話す隙間を見つけて話さない限り、ずっと話す機会などないのだということに気づき、なるべく自分なりに授業に参加していくよう努力しました。それと、日本の授業では間違えることがどことなく「恥ずかしい」という雰囲気もあって、自信のある答えしか発言しないようにしていた記憶があるのですが、そこでは皆堂々と間違えて、それを正してもらって学んでいく、という流れでした。ですから、間違えることは全然恥ずかしいことではなく、むしろわからないままやり過ごして行くことの方が後で何も身につかないことになるのだということなのでしょう。

次に実際の授業についてですが、月曜日から金曜日まで週24時間（月曜から水曜までは朝9時から夕方4時まで、木曜と金曜は朝10時から13時まで）のカリキュラムが組まれており、Writing、Reading、Speaking、Listening等を5～6人の先生が教えるという形式でした。その他に、主にpostgraduateの留学生を対象としたin-sessional classが無料で開講されており、ここでも10種類以上の様々な英語の授業が展開されていました。

まず、月曜日と火曜日の朝からWritingの授業がありました。朝のまだ頭の働かないうちから英語の文章を書くのは少々きつかったです。それぞれ、「General Communication in Writing」と「Business Communication in Writing」に分かれており、前者は、自分の家族や尊敬する人物、好きなスポーツ等の比較的扱いやすいテーマを選んで、文章の構成方法や接続詞の使い方等を段階的に学んでいきました。

一方、後者のBusiness Writingでは、製品の発注や議事録の作成、新製品の宣伝、企業内部における要望書の作成について、ビジネスライターに特有の様々な言いまわしを主に学びました。

これら2つの授業では、毎回必ずessayを書く宿題が出たのでそれをこなすのが大変でした。宿題をやってもなくても先生は特別注意はしないのですが、あくまでも自分の責任で勉強している以上、みんな比較的真面目に提出していました。提出したessayは、文法の誤りから単語のスペルミスまで細かくチェックがされてすぐに戻されてくるので、大変勉強になったと思います。

「Listening and Speaking」という授業は皆が最も興

味を持っている内容なだけに、一番活気のあった授業の一つでしょう。先生も学生からの評価が高い人でしたので、授業の進め方がとても上手く、生徒全員になるべく話す機会を与えるように工夫していました。扱った教材も、最初の頃はイギリスの文化や歴史、一般的な人々の考え方や生活についてのものが多かったのですが、次第に会話におけるより実践的な表現方法や、最新の国内のニュースを取り上げたり、ドキュメンタリー番組を見た後にディスカッションをしたりと、バラエティーに富んでおりました。それぞれの国の事情について質問されることも多く、自分が日本の社会について知識不足であることと、たとえ知っていたとしても英語で説明することの難しさを痛感させられることがしばしばありました。

また、ここでは15～20分程度のプレゼンテーションを各タームの最後に行ないましたが、それに伴ってより効果的なプレゼンテーションの方法について、例えば順序を追って説明するのにある程度決まった表現方法を教えてくれたり、ホワイトボードやOHPを使う際の注意点や立ち位置、聴衆との視線の合わせ方まで詳しく説明がありました。私はただでさえ人前で話すことは得意とはしない方なので、それをしかも英語ですることに最初はかなり憂うつでした。なかなか思ったようにはいきませんでしたし、ホワイトボードの字も乱雑で先生からの指摘も多かったのですが、終わった後はそれなりの達成感があり、また他のクラスメートの発表を聞くことによっても学んだことが多かったです。

授業の中には、当然内容が自分には難し過ぎるものもあり、2ターム目から始まった「General academic reading skills」は、扱う教材が大学院進学のための英語能力試験であるIELTS用に作成されたテキストからのものが多く、私にとってはかなり高度な内容でした。長文で内容が難しい上に読む時間が短いので、いかに早くざっと目をとおして問題に答えていけるかが一番の問題でした。

「Business Communication」では日常会話の他に、様々なビジネスシーンにおける電話でのやりとりや会議の進め方、仕事をする上で人間関係や交渉術についてを中心に、ペアを組んで練習したりグループでディスカッションをしました。始めのうちは、ホテルの予約やレストランでの会話にも使えるような、いわゆる日常生活でも役に立つ表現が学べて良かったのですが、毎回似たようなことをさせられるので、そのうちみんな飽きてきたようです。2ターム目からは、リスニングを重点的に行ない、ある国内企業のスタッフに対するインタビュー形式のビデオを見ながら要点を書き取るということをよく行ないました。

ここでも時には学生に短い発表をさせることがあり、各種のグラフを説明する際の表現方法について詳しく教えてくれました。

これらの授業の他に、留学生のために開講されているin-sessional classの中で出来るだけ行くようにしていたのが「Listening to The News」と「Pronunciation」の

クラスです。

「Listening to The News」は、週2回当日の朝録画したBBCニュースを見ながら先生の解説を聞いて、ニュース英語に親しみリスニングを強化するというものでした。録画したニュースから先生が書き起こしたニュースの原稿が配られ、一回目はなるべくそれを見ずに内容を把握し、その後留学生にとって難しいと思われる単語や言い回しの解説がされた後2回目を見る、という具合に進められていました。私のいた時期はイラク関連のニュースが頻繁に流れていましたので、国際政治や戦争に関する単語もよく取り上げられました。ユーモアやジェスチャーを交えたテンポの良い解説は大変わかりやすく、いつも教室内は立ち見が出る程の人気ぶりで、私も授業と授業の合間の昼休み中であるにも関わらず、出来るだけ受講するようにしていました。

もう一つの「Pronunciation」では発音する際の舌の位置や口の動きをわかりやすく図で示したり、発音の似ている単語や日常会話を聞き取ったり、ペアを組んでの発音練習を繰り返していました。この授業を継続的に受けることによって、いわゆるイギリス英語の発音の長がつかめるようになり、それと同時に自分のリスニングの能力も少しずつ向上したようです。

授業の他に、週一回チュートリアルといって、学生一人一人についているチューターの先生との面談が約20分あり、私の場合は少々神経質な感じのする、いかにも典型的なイギリス人女性(?)という印象の先生がチューターでした。そこでは学習の相談や個人的な悩みまでどんなことでも話することができるので、イギリスに来て最初の頃英語がなかなか聞き取れないことに焦りを感じていたことから、助言を求めたところ、「とにかくラジオでもTVでもいいからたくさん英語を聞いて、そしてあまり自分にプレッシャーをかけずにリラックスして聞きなさい。あなたは朝から晩までずっと授業を受けているのだから、その後はなるべくリラックスすることも重要よ」ということをアドバイスしてくれたり、また、私が決まった授業以外に更にin-sessional classをいくつか受講するなどして、少し疲れ気味だった時などには、「最近授業に集中できていないみたいね。」と、すぐに指摘されました。それ以外にも普段の生活において何か困ったことはないか等、いつも自分の生徒のことを気にかけてくれていました。

3. 授業以外での活動

大学の周囲には娯楽施設が少ないこともあり、キャンパス内には立派なアートセンターやスポーツセンターがありました。アートセンター内の劇場では演劇、コンサートやダンスなどが観られ、映画館では最新のものも含めて映画が頻繁に上映されていたので、クラスメートを誘って観に行ったり、休日になるとキャンパス内のテニスコートでテニスをすることもありました。また、学生のほとんどが学内の寮に住んでいるため、あちらこちらの寮のキッチンでパーティーが開かれる事が多く、私も

友人に誘われて行ったこともありましたが、食べ物は一ナツツ程度しかなく、立ったままビールやワインを飲んでいろいろな人と会話を楽しむというのが一般的なスタイルのようでした。

また私達はコテージ(1棟を2人で借り、1人あたり£337.50 約65,000円)に住んでいたわけですが、このキッチンでもクラスメートを招き、それぞれ各国の料理を持ち寄ってパーティーを開いたりもしました。この時感じたのが、英語が母国語ではない人達とたわいも無い話をするのが、どれほど楽しいものか、つまり、お互い使っている英語というのは、お互いが確実に分かる単語であり言い回しであるので、理解できなくて困ることがほとんどないのです。英語の勉強にはそれほどならないかも知れませんが、様々な国から来た人達と共通の話題で思いきり笑ったり出来るのは、まさに英語のおかげなのだと強く感じた時間でした。

せっかくイギリスにいるのだからもっとイギリス人との交流を深めたいと思い、タームとタームの間の冬休み中にイギリス人の家庭に滞在し、彼らの実際の生活を体験する機会を得ることができました。クリスマスはウェールズで過ごしたのですが、比較的地味なもので、自分達の家族や近所の人たちとの交流を大切に、朝は教会に行ったり、夜は近所のパブに行く程度で、派手なパーティー等はせず、日本のお正月のような雰囲気でした。初めて彼らと会話をした時、ウェールズ訛りの英語がさっぱりわからなく、今まで自分が勉強してきた英語はいったい何だったのだろう、と大きなショックを受けたのを覚えています。

ニューイヤーを過ごした家庭は、HOSTという国内のホームステイ先を斡旋する機関から紹介されたところで、コベントリーからはバスで北東へ2時間ほどのところにある、リンカーンという街で暮らす奥さんと旦那さんの2人家族の家に滞在しました。実はその家庭は「vegan(完全菜食主義者で肉や魚のみならず卵や乳製品も一切食べない。革製品も身に着けない。)」で、たまたまその時期に受け入れてくれる家庭が少ないこともあり、そのような家庭でもいいのかどうかを前述のHOSTから聞かれ、それまで聞いたこともなかったveganという人達がどのような食生活を送っているのか、ちょっとした興味本位で承諾したのです。一体どんな料理がでてくるのだろうか、きっとサラダだけですぐにお腹が空くのではないかと不安だったのですが、野菜や豆をふんだんに使ったメキシコ料理や、豆腐を使ったオムレット風のもの、また牛乳の代わりに豆乳を使って料理するなど、いろいろ工夫されたものが出され、実においしいものでした。実は奥さんは料理をするのが大好きで庭ではたくさんの野菜を栽培したり、広々としたキッチンにはあらゆる食材が並んでおり、また私がお土産で持って行ったあずきの缶詰を使ってオリジナルのイギリス風デザートまで作ってくれる等、貴重な経験ができたと思います。

4. おわりに

研修に出発する前、「半年は決して長くはない期間だが、1年間いるのと変わらないくらいに英語を上達させたい」とかなり意気込んでいたのと同時に、このような機会はめったにないのだから、思いきり楽しんで帰りたいと思っていました。実際イギリス人だけではなく、様々な国から来ている人達と友達になることができ、また最初はお互いに言いたいことが伝わらなくて苦労したとしても、根気よく理解しようと努めることが重要なのだとあらためて認識できたことは、日本で英語を学ぶだけでは決して得られないような経験であったと思います。

今まで私が行った外国旅行では、その国の良いところしか見えませんでした。今回初めて自分が外国人として生活してみると、イギリス人の考え方、仕事のやり方、生活の仕方等に馴染めず、戸惑うことも多々ありました。しかし、同様に日本について考えてみると、同じように外国人にとっては不便なことが数多くあり、日本も彼らにとっては決して住みやすい国ではないのでは、と考えようになりました。

また、各国から来たクラスメートが、想像していた以上に日本の企業や文化についてよく知っているのには驚かされました。扱った教材の中でも例えば日本とイギリスやアメリカのビジネスの進め方の違いについて取り上げられていたり、「日本人のYesはYesではなくNoを意味するのだ」ということをクラスメートに言われて苦笑したり、中にはステレオタイプとも取れるイメージを持っている場合もあり、その都度状況を説明するのに苦労しました。それだけ日本のニュースが海外に流れ、かつ日本のビジネスに興味を抱いている人達が多いのに対し、自分こそイギリスを代表する企業の名前も挙げられないという始末で、この経験がきっかけとなって以前にも増して海外で起こっている状況に目を向けるようになりました。

日本で過ごすのとは比べものにならないほど、充実した半年間を過ごすことができ、そしてこれだけの時間を自分がやりたかった語学の勉強に費やせたことは、大変貴重な経験となりました。ここで身に付けたことを今後も維持し、仕事に生かせるよう努力をしていきたいと思っています。最後になりますが、このような研修の機会を与えてくださった皆様、そしてウォーリック大学でお世話をしてくださったスタッフの皆様感謝します。



クラスメートとチャイニーズレストランにて(上段中央)

英国での研修を終えて

理学系研究科等生物科学専攻図書室
山谷 弘美
(ウォーリック大学)

私は本学の国際交流担当職員在外研修のため、平成14年9月27日から平成15年3月23日までもう一名の派遣者とともに英国ウォーリック大学に滞在した。ウォーリック大学は1965年に創立された比較的新しい大学で、ロンドンから列車で1.5時間ほどの中部イングランドの産業都市コヴェントリーの郊外にある。大学の南方には古くは温泉地であったロイヤル・レミントン・スパー市があり、大学キャンパスまではいずれの市からもバスで30分くらい、周囲には緑豊かなのどかな風景が広がる場所である。

私達は大学のCELTE (Center for English Language Teacher Education) というデパートメントが主催する集中英語コースに2学期間参加して語学研修を行った。この集中英語コースにはアカデミッククラスとビジネスクラスの2クラスがあり、コースの目的として英国の大学院で勉強するために十分な英語力、職業上で使える十分な英語力を修得するという2つの柱が掲げられている。入学者は主に英国大学院進学希望者や経営学修士号(MBA)取得を目指す留学生である。昨年度は1クラスの人数は約10名で、私達は後者のビジネスクラスで中国、台湾、クウェート、リビア、タイ、韓国、ベネズエラ人のクラスメート等と共に勉強した。学習効果を上げるためのカリキュラムは文法、ライティング、リスニング、スピーキング、リーディング、スタディスキル等の科目から総合的に構成された週24時間のフルタイムクラスだった。毎日の授業の他に宿題と自習が重要とされ、学習量はとても多かったが、国際的な環境で英国人講師から英語を学ぶのはとても楽しかった。英語コースの事務担当者も留学生に対して親身に世話をしてくれた。グループによる授業の他、学生一人一人に対して特定のチューターが定められ、学習の進捗状況等についてチューターと学生が個別に面談するチュートリアルも毎週行われていた。親切で人間的にも魅力のあるチューターとは学習面だけでなく研修生活全般にわたって相談したり話し合うことができ、私はこのチューター制度は英国式教育の大きな長所であると思った。CELTEでは学期毎にウェルカムランチ、ダンスパーティーやオックスフォード、ケンブリッジ、ウォーリック城等への日帰りエクスカージョンが計画され、忙しい勉学の合間にも社交的な催しや英国文化に触れる機会等が提供されていた。

CELTEのクラスは構成メンバーからいっても多文化混合クラスであり、英語学習にもそれぞれの国民性や各国事情を伺うことができたことは興味深かった。日本人は全般的に文法面から英語を習っていて知識はあるのだが、リスニング・スピーキングの実践面が弱い。比べて他国の留学生たちは文法の知識はない人でもリスニング

やスピーキングは強い人が多く、クラスにも積極的に参加しているように見える。英語教育の方法や開始年齢が結果に及ぼす影響の大きさが理論と実際面を通して次第にわかってきた。また授業にはディスカッション形式が多く取り入れられていたので、出身国による考え方の違いが表れてきて日本人のみのクラスにはない面白さがあった。1学期が始まってしばらくした頃、CELTEが主催する留学生対象のIn-Sessional クラスというプログラムが始まった。これは昼休みと夕方の時間帯に設定された1回1時間の自由参加の授業で、無料で受講できるので開講当初はいずれのクラスも大変混み合っていた。集中英語コースの授業のみでも十分な量であるのと内容が専門的になり大学院生の受講が多いので、英語コース受講生向けのクラスは多くはなかったが、私は発音やライティング等、興味のあるいくつかのクラスに参加した。In-Sessionalには通常クラスよりもっと大学らしい雰囲気があり、これらのクラスで英語の発音の鍵や少し上級の英語を学んだり、他学部の友人と知り合う機会を得ることができた。

ウォーリック大学のキャンパスは現代的なイメージでガラス張りの建築物が多いが、メインキャンパスの中心には一際目をひくアートセンターがあり、バスもこのセンターの前から発着する。ロンドン外では最大というアートセンターにはコンサートホール、劇場やシネマ、アートギャラリー、会議場、音楽練習室、レストラン、カフェバー、書店、売店等の設備が揃っており大学内外の人々でいつも賑わっていた。劇やコンサート、音楽のレッスンは日本よりも安い値段で楽しめ、映画も多彩に上映されていたようである。広大な敷地には多くの学生寮、学生会館、コンビニエンスストア、駐車場、体育館、グラウンド、診療所や立派なホテル、いくつかの食堂が点在していて、学生が使える厚生施設やスポーツ、音楽等のプログラムは充実していた。近年英国では国の政策として留学生の受入を拡大しているため、英国中どこでも留学生は多いようだったが、学生総数約18,000人のうち留学生が4,000人以上というウォーリック大学では、キャンパスを歩いている中国・アジア系、ほか様々な国々からの留学生が占める割合が非常に高いことが実感された。インターナショナルオフィスでは各国別の留学生を対象としたパーティーや、近郊への日帰りツアーを企画したり、留学生のための英国ホームステイ機関への紹介も行っていた。これは英国人ボランティアによって運営されている機関でホストの数が足りないくらい留学生に人気があったようだが、私も運良くクリスマス休暇にスコットランドのお宅へホームステイに招待していただき、ホストファミリーやその友人の方々、ゲストのロシア人留学生とともに現地のクリスマスを体験することができた。

私達東大からの派遣者は、昨年度はメインキャンパスから至近距離にある世帯向けの宿舎へ入居することができた。そこは木立に囲まれた静かな一角で、14戸の煉瓦のコテージが建ち、野鳥やリスが毎日やって来るような

ところだった。私達のお向かいには偶然日本人研究者の家族だったが、他のコテージの住人はすべて外国の研究者や大学院生の家族だった。この宿舎はクラスメート達に評判がよく、各国料理を持ち寄ってインターナショナルパーティーを開いたり、キッチンで一緒に料理を作ったりすることができた。学期末などにはクラスのメンバーで町の各国料理のレストランへ出かけることもあった。出発前にはこのような多国的文化圏で生活することになるとは想像し難かったが、現在英国には多くの外国人が居住しており、多民族、多文化な社会へと大きく変化してきている。日本のような単一民族国にいると考えるににくいことだが、ロンドンでは街を歩いていて聞こえてくる言語の50%以上は英語以外の言語だったと話していた人がいるくらい、国際化が進んでいるようである。

2学期になってからCELTEのBook Clubという学生の会員制読書クラブに入り、昼休み週1回のボランティアで学生共通室にある小さな文庫を開く手伝いをした。部屋のロッカーの中にはCELTEの学生がよく使う図書が集められていて、時間になると大勢の大学院生が本を借りに来たり、部屋で雑談したりしていた。彼らは母国では英語教師が多く、語学力のレベルも高いので対応するのも緊張感が伴ったが、英国大学院生活の様子その他、いろいろな会話ができたことはとても楽しい思い出である。

私は語学研修のかたわら、インターナショナルオフィスと図書館長の取りはからいによって、ウォーリック大学図書館の各部門と、別キャンパスの生物科学科内にあるバイオメディカル・ライブラリーを訪問させてもらうことができた。ウォーリック大学図書館は東大と異なり中央館集中型であり、学科図書室はきわめて例外的である。ウォーリックでは利用できる電子ジャーナルやデータベースの種類が豊富で、大学の方針として電子ジャーナル化が強く推進される過程にあるところだった。なお、図書館の1階には学生用端末を集中的に配置したコンピューターセンターがあり、こちらは図書館ではなくITサービス部門の管理下におかれていた。ライブラリアンである図書館長から英国の図書館事情や日本との共通点や違いについて様々なお話ができたこと、各部門の司書の方々に大勢お目にかかれたことは私にとって大変啓発的な経験だった。英国の大学司書は専門職としての位置付けが高いと感じられたが、スタッフ制度については米国とも日本とも異なるようである。英国滞在中にはオックスフォード大学やケンブリッジ大学等の図書館も訪問させていただいたが、大学図書館、学部、学科図書館の他に各コレッジの図書館もあり、ウォーリックとは全く異なる運営形態の大学や図書館の存在を知ったことや、各大学の司書の方々にご親切に対応していただき、最新の情報を得ることができたことは有意義だった。また、日本の大学図書館でも益々電子化の側面が強くなっているおり、英国各大学の現状を知ることができ非常に有益だった。

英国では多くの方々との出会いがあったが、学生の構

成でも非常に国際的な環境にあるウォーリック大学の生活を通して、国籍は異なっても人と人との交流には何か共通するものがあるのではないかと、とはいえず、人々の思考や行動が自国の文化によって強く規定されているかということ強く認識させられた。英国に滞在している間は、日常生活の思わぬところで文化的な違いに遭遇し、西洋と東洋の違い、日本との違いをよく考えていた。英国の大学で学ぶ上で必要とされる基本的な姿勢や考え方は日本とは大きく異なるようであるが、短期間の滞在でそのようなことを深くまで理解するのはなかなか難しい。英語力が十分でない外国人が異文化の中で暮らしていく上では困難なことも多かったが、物事に対しては常に異なる考え方が存在することを体験的に知ることができたこと、日本に対しても客観的な視点を持てたことは海外生活の大きなメリットだった。授業や宿題でも日本人の考え方や文化について話したり書いたりしなければならぬことが多々あり、以前よりも日本文化に対する関心がずっと強くなったことは私に生じた変化の一つである。

研修当初から半年という限られた期間にできるだけ多くのことを吸収して帰りたいと考えていたが、長いようで終わってみるとあっという間に経ってしまった6カ月だった。研修仲間やウォーリックのクラスメート、スタッフの方々に助けられながらできる限りベストを尽くせたことを大変有り難く思う。この研修によって得られた語学力や知識と経験を今後の業務に役立て、還元できるよう努めていきたい。このような貴重な機会を私に与え、研修生活を支えてくださったすべての東大関係者の皆様及びウォーリック大学の皆様に心から感謝している。



CELTEがあるソーシャルサイエンスビルディング

*なお、文部科学省及び日本学術振興会派遣事業等で現在海外へ派遣されている事務職員は以下のとおりである。()内は派遣前所属部局

東郷 太郎 (医学部附属病院管理課用度第二掛)
派遣先：カリフォルニア大学サンディエゴ校 (米国)
派遣期間：平成15年3月29日～平成16年3月27日
派遣プログラム：東京大学国際交流担当職員在外研修 (長期)

古川 稔子 (柏地区事務部企画課渉外・広報掛)
派遣先：カリフォルニア大学サンタバーバラ校 (米国)
派遣期間：平成15年3月28日～平成16年3月26日
派遣プログラム：東京大学国際交流担当職員在外研修 (長期)

能登 亜希子 (研究協力部国際交流課)
派遣先：モンタナ州立大学等 (米国)
派遣期間：平成15年6月14日～平成16年6月1日
派遣プログラム：文部科学省国際教育交流担当職員長期研修プログラム

細谷 敦子 (研究協力部国際交流課)
派遣先：日本学術振興会ロンドン研究連絡センター (英国)
派遣期間：平成15年4月1日～平成16年3月30日
派遣プログラム：日本学術振興会国際学術交流研修

事務職員の海外長期研修プログラムとして以下のものがあるが、詳細については国際交流課に照会されたい。

- ・東京大学国際交流担当職員在外研修 (長期)
- ・文部科学省国際教育交流担当職員長期研修プログラム
- ・日本学術振興会国際学術交流研修
- ・日本学術振興会研究連絡センター事務官派遣
- ・中国政府奨学金留学生 (行政官派遣)
- ・日墨研修生・学生等交流計画派遣生

(研究協力部)



≪ 部局ニュース ≫

大学院人文社会系研究科・文学部で外国人留学生等との懇親会開かれる

6月18日(水)18時から、山上会館地下食堂において、文学部主催の外国人留学生・研究員及び外国人スタッフとの懇親会が開かれた。

懇親会には、文学部及び大学院人文社会系研究科に在籍する14カ国の外国人留学生・研究員等約60名と関係教職員約50名及び留学生博士論文作成支援ボランティア・ネットワークである「三金会」の先生方7名が参加。まず稲上研究科長の挨拶があり、続いて吉田国際交流委員会委員長の発声で乾杯したのち、懇談が始まった。



稲上研究科長の挨拶

懇談は、終始和やかな雰囲気の中盛会に行われ、途中に「三金会」の先生を代表して、久野猛(元日比谷高等学校校長)氏から「三金会」の名称の由来や活動状況等を踏まえた留学生とのエピソード及び昨年の博士論文作成に関する日本語のサポートの成果として、めでたく学位が授与された事などの挨拶があり、続いて留学生のパフォーマンスとして、社会学専門分野のセツ・セイさん(中国)他9名の留学生による「歌の披露」、さらには、同じく社会学専門分野のソールズブリー、ポールさん(オーストラリア)の空手の形が披露され、日本に来て2年以上にわたり修行されている技に留学生を含めた出席者から盛大な拍手があった。最後に留学生を代表して、韓国の韓京子(博士課程3年)さんより謝辞があり、大変流暢な日本語での「日本における留学生生活について」の挨拶は、参加者すべてに感銘をあたえた。



留学生による歌の披露

出席した留学生は、それぞれの国の特色や言葉で友好を深め、留学生同志の楽しいひと時を過ごすことができ、20時に盛況のうちに閉会した。

(大学院人文社会系研究科・文学部)

ハワード・ガードナー教授講演会

大学院教育学研究科のCOE基礎学力研究開発センターとソニー教育財団との共催による講演会「21世紀の教育、創造性と多重知性」(ハワード・ガードナー教授、ハーバード大学)が、6月7日(土)、山上会館において開催された。ガードナー教授は米国で最も著名な心理学者であり、この日も、会場の収容人数を越える約200名の教育学者、心理学者、院生、教師が参加した。ガードナー教授の「多重知性(multiple intelligence)」の理論は、脳科学の研究と知能の研究の双方に基礎をおき、従来のIQ(知能テスト)の能力観を根本から覆し、人間の能力を①言語的知性、②論理・数学的知性、③音楽的知性、④空間的知性、⑤身体運動感覚的知性、⑥対人的知性、⑦内省的知性、⑧博物学的知性という相対的に独自の知性領域の集合として認識する方法論を提示している。講演においては、「多重知性」の理論と古今の芸術家や学者の「創造性」に関する伝記研究の成果が提示され、参加者との質疑応答が行われた。



講演を行うガードナー教授

(大学院教育学研究科・教育学部)

日本史の基幹史料集750冊をロシアへ寄贈する

史料編さん所では、かねて研究協力をいただいていたサントペテルブルグ国立大学東洋学部へ、『大日本史料』『大日本古文書』『大日本古記録』など、これまでに出版した日本史の基幹史料集750冊を寄贈した。6月23～29日、所長石上英一教授、保谷徹助教授、小野将助手、木村直樹助手、松澤裕作助手と大学院人文社会系研究科藤田覚教授からなる訪口団が建都300年に沸くサントペテルブルグ市を訪問し、東洋学部長ステプリン＝カメンスキー教授との間で寄贈覚書を取り交わした(表紙参照)。

サントペテルブルグ大学の東洋学部は、ロシアにおける日本学研究・教育の発祥の地であり、かの大黒屋光太夫の時代からの伝統を持っている。寄贈書は、今回も協力をいただいたワジム・クリモフ教授が所属する極東

史学科研究室で日本学研究のためにひろく活用されることになる。

ロシアへの史料集の寄贈は、1973年、田中角栄首相が訪ソした際に、当時の林健太郎総長を通じて、モスクワのレーニン図書館（現国立図書館）へ寄贈して以来のものとなった。なお、今回の寄贈にあたっては、外務省ロシア課およびサンクトペテルブルグ駐在村松昭南総領事、三好俊介専門調査員のご助言とご協力をたまわった。



日本国総領事館にて

史料編さん所ではロシア所在日本関係史料の調査研究をすすめており、今回の訪問でもロシア国立海軍文書館の所蔵史料を調査し、史料調査への協力に関する覚書を締結した。また、ロシア中央歴史文書館、科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルグ支部の調査を行い、協力を要請した。



古文書の閲覧（ロシア国立海軍文書館）

（史料編さん所）

≡ 掲示板 ≡

平成16年度東京大学学術研究奨励資金による国際交流助成事業募集について

下記要項のとおり募集しますので、各事業の提出期限までに所属部局を通じ、研究協力部国際交流課まで提出願います。

なお、申請手続き等詳細につきましては、各部局担当掛へお問い合わせください。

各事業の申請書類は下記のURLにてダウンロードできます。

<http://www.adm.u-tokyo.ac.jp/kenkyou/kokusai/gaku-kin.html>

1. 海外学術交流研究拠点設置・運営経費助成事業
2. 東大シンポジウム開催経費助成事業
3. ジョイント・フォーラム開催経費助成事業

平成16年度 学術研究奨励資金による 海外学術交流拠点設置・運営経費助成募集要項

1. 趣 旨

国際化の進展に伴い本学における教育・研究の一層の推進に寄与するため、海外での教育・研究の推進、当該国の学術団体・高等教育研究機関との間の学術交流の調整・推進、本学の教職員・学生等関係者に対する便宜供与などの目的をもった海外における学術交流の基地となる海外学術交流拠点（以下、「海外拠点」という。）の設置（事前調査を含む）及び運営に対して、必要な経費の一部を学術研究奨励資金から助成するものである。

2. 応募資格

海外拠点設置（計画）の代表者である本学の教授又は助教授

3. 助成期間

2年以内（引き続き2年目の助成を希望する場合は、再度申請をするものとする。）

4. 補助の対象となる要件

- (1) 東京大学の国際戦略上、重要度が高いもの
- (2) 助成期間終了後の運営体制が検討されているもの

5. 助成経費

- (1) 海外拠点開設のための事前調査に係る経費（旅費、謝金等）
- (2) 海外拠点への教官の派遣旅費
- (3) 海外拠点運営経費（消耗品費、謝金、設備備品費、建物借料等執行可能なもの。）

※ (1)及び(2)の場合の旅費は、本学から訪問先研究機関までの最も経済的な通常の経路及び方法による旅行に必要な往復航空運賃（エコノミークラスのディスカウント運賃）、鉄道等往復運賃（本学から最寄りの空港までとする）、滞在費（旅費法による日当、宿泊料）及び日本国内空港施設使用料とする。

6. 助成額及び採択予定件数

1 海外拠点当たり、400万円程度を限度とし、採択件数は、2件程度を予定している。

7. 申請手続及び提出期限

別紙様式1により、平成15年9月12日（金）までに、所属部局長を通じて総長あて提出すること。

8. 選考及び採否の通知等

選考は学術研究奨励資金実施委員会が行い、採否の結果は平成15年11月下旬頃までに所属部局長あて通知する。

なお、選考に当たって必要な場合は、ヒアリングを実施することもある。

9. 報告書の提出

別紙様式3により、平成17年4月末日までに、所属部局長を通じて総長あて提出すること。

10. 申請書等送付先

研究協力部国際交流課

平成16年度東京大学学術研究奨励資金による 東大シンポジウム開催経費助成募集要項

1. 趣 旨

学際的で部局間にまたがるやや規模の大きい国際研究集会を「東大シンポジウム」として開催することとし、そのために必要な経費の一部を学術研究奨励資金から助成するものである。

2. 応募資格

本学の教授、助教授、講師又は助手とする。

3. 対象分野

人文、社会及び自然科学の全分野

4. 助成の対象となる要件

- (1) 学術的に重要かつ緊急度が高く、東京大学の名称を冠するにふさわしいもの（ただし、学会主催による国際会議等を除く。）
- (2) 特定の主題について、内外の研究者が学術的発表及びそれに関する討議を行い、その分野の研究を増進することを目的とするもの
- (3) 日本側の主要メンバーは、本学教官で、2以上の部局の教官が参加するもの
- (4) 主催にかかる運営の学内体制が十分に確保されるもの
- (5) 平成16年度中に開催されるもの
- (6) 主たる経費の出途が学術研究奨励資金によるもの

5. 助成の対象となる経費

- (1) 外国人招待講演者の旅費及び滞在費並びに外国人一般参加者の滞在費
 - (2) 国内の学外招待講演者の旅費及び滞在費
 - (3) 招待講演者の講演謝金（主として外国人参加者）
 - (4) シンポジウム開催に直接必要な印刷（製本）費、通信運搬費、会場借料等
- 注）本学の教官は招待講演者とみなされないので講演謝金は支給されない。また、原則として、旅費も支

給されない。

6. 助成額及び採択予定件数

1件の助成額は、400万円程度を限度とし、採択件数は、2件程度を予定している。

7. 申請手続及び提出期限

開催責任者は、「平成16年度東大シンポジウム開催経費申請書」（別紙様式1）一部を、当該シンポジウムの概要（サーキュラー等）の資料があれば添付し、所属部局長を通じて、平成15年8月1日（金）までに総長あて提出すること。なお、各部局内における提出期限については、各部局事務担当に問い合わせること。

8. 選考方法及び採否の通知等

選考は学術研究奨励資金実施委員会が行い、採否の結果は平成15年9月下旬頃までに、開催責任者の部局長あて通知する。

9. 報告書の提出

開催責任者は、シンポジウム終了後1ヵ月以内に「平成16年度東大シンポジウム実施報告書」一部を所属部局長を通じ速やかに総長あて提出すること。（様式については採択通知に添付する。）

10. 申請書等送付先

研究協力部国際交流課

平成16年度東京大学学術研究奨励資金による ジョイント・フォーラム開催経費助成募集要項

1. 趣 旨

本学と海外の優れた大学等と共催で行われるフォーラム等の開催に必要な経費の一部を学術研究奨励資金から助成するものである。

2. 応募資格

ジョイント・フォーラム開催（計画）の代表者である本学の教授又は助教授とする。

3. 対象分野

人文、社会及び自然科学の全分野

4. 助成の対象となる要件

- (1) 海外の大学・研究機関等で開催されるもの
- (2) 学術的に重要かつ緊急度が高く、東京大学が海外の大学等と共催するにふさわしいもの（ただし、学会主催による国際会議等を除く。）
- (3) 特定の主題について、内外の研究者が討議を行い、その分野の研究を増進することを目的とするもの
- (4) 日本側の主要メンバーは、本学教官で、2以上の部局の教官が参加するもの
- (5) 主催にかかる運営の学内体制が十分に確保されるもの
- (6) 平成16年度中に開催されるもの

5. 助成の対象となる経費

- (1) 本学教官の派遣旅費及び滞在費
- (2) 学外招待講演者の旅費及び滞在費
- (3) ジョイント・フォーラム開催に直接必要な経費（印刷（製本）費、通信運搬費、謝金、会場借料等

執行可能なもの)

6. 助成額及び採択予定件数

1 件の助成額は、200万円程度を限度とし、採択件数は、3 件程度を予定している。

7. 申請手続及び提出期限

開催責任者は、「平成16年度ジョイント・フォーラム開催経費助成申請書」(別紙様式1) 一部を、当該フォーラムの概要(サーキュラー等)の資料があれば添付し、所属部局長を通じて、平成15年9月12日(金)までに総長あて提出すること。なお、各部局内における提出期限については、各部局事務担当に問い合わせること。

8. 選考方法及び採否の通知等

選考は学術研究奨励資金実施委員会が行い、採否の結果は平成15年11月下旬頃までに、開催責任者の部局長あて通知する。

9. 報告書の提出

開催責任者は、フォーラム終了後1ヵ月以内に「平成16年度ジョイント・フォーラム実施報告書」一部を、所属部局長を通じ速やかに総長あて提出すること。(様式については採択通知に添付する。)

10. 申請書等送付先

研究協力部国際交流課

(研究協力部)

「教養学部報」第467(7月2日)号の発行
——教官による、学生のための学内新聞——

山内 昌之: イラク戦後の自爆テロリズム

油井大三郎: エスカレートする「対テロ戦争」とアメリカ知識人

工藤 和俊: コネチカット大学滞在を終えて

繁榊算男・丹野義彦・大森拓哉:

学生相談所が創設50年を迎えました

——50年で変わったこと、変わらないこと

安東 克之: 救急救命について(2)

<本の棚>

渡會 公治: 『ジョン・レノン・ナンセンス作品集
らりるれレノン』佐藤良明訳

教養の裸理留レレのん

<時に沿って>

アルヴィ宮本なほ子: 寄り道の果実

石橋 純: まわり道

<投書欄>

三谷 博: 時間制作製に問題あり

「教養学部報」は、教養学部の正門傍、掲示板前、学生課ロビー、生協書籍部、保健センター駒場支所で無料配布しています。バックナンバーもあります。

(大学院総合文化研究科・教養学部)

第20回理学系研究科技術シンポジウム

<発表>

EPMAを用いた電子線照射に不安定な試料の微量成分分析技術

吉田英人(地球惑星科学専攻)

稚魚ネットによる相模湾中層生物の採集

関藤 守(附属臨海実験所)

PA(反応粒子磁気分析装置)の移設と制御系改造

山崎則夫(原子核科学研究センター)

植物園における系統保存

小牧義輝(附属植物園本園)

電子顕微鏡について

立川 統(地球惑星科学専攻)

<特別講演>

『金属イオンを並べるための分子デザイン』

塩谷光彦(化学専攻)

日時:平成15年9月5日(金)13時より

会場:理学部化学本館講堂(5F)

文京区本郷 7-3-1

主催:大学院理学系研究科

技術部シンポジウム実行委員会

問い合わせ先:TEL.03-5841-4388(櫻井)

(大学院理学系研究科・理学部)

医科学研究所「オープンキャンパス」開催

医科学研究所では、下記のとおり「オープンキャンパス」を開催いたします。

皆様のご来場をお待ちしております。

日時 平成15年8月3日(日)10時~16時30分

場所 医科学研究所内

1号館講堂、近代医科学記念館、白金ホール等

港区白金台4-6-1

(営団地下鉄南北線・都営地下鉄三田線

白金台駅下車)

内容

・講演

「動物との共生を考える」

甲斐知恵子 実験動物研究施設教授

「たんぱくしつがおもしろい」

大海 忍 遺伝子動態分野助教授

・実験の公開(アムジュンホール等)

・資料の公開(歴史資料、標本資料、映像資料)

・施設見学

(ヒトゲノム解析センタースーパーコンピュータ)

○問い合わせ先

医科学研究所管理課庶務掛

TEL : 03-5449-5572

<http://www.ims.u-tokyo.ac.jp/Welcome.html>

(医科学研究所)

地震研究所「一般公開と公開講義」開催

地震研究所では、下記のとおり「一般公開と公開講義」を開催いたします。

皆様のご来場をお待ちしております。

「一般公開」

テーマ：でかけよう地球の探検

内容 施設見学

日時 平成15年7月24日(木)、25日(金)

10:00~16:30

場所 地震研究所内

文京区弥生 1-1-1

地下鉄 南北線 東大前駅 徒歩3分

地下鉄 千代田線 根津駅 徒歩8分

「公開講義」

日時 平成15年7月24日(木)

14:40~17:00 (14:00開場)

内容 講演

「水は地震発生にどうかかわっているのか」

笠原 順三 教授

「噴火予知の明るい展望vs高いハードル」

鍵山 恒臣 助教授

場所 安田講堂(800名 先着順)

文京区本郷 7-3-1

地下鉄 南北線 東大前駅 徒歩6分

地下鉄 千代田線 根津駅 徒歩8分

地下鉄 丸の内線・大江戸線

本郷三丁目駅 徒歩6分

○問い合わせ先

地震研究所庶務掛

TEL : 03-5841-5667

<http://www.eri.u-tokyo.ac.jp/Jhome.html>

(地震研究所)

総合研究博物館特別展示

「東京大学学位記」展—博士研究にふれる—

博士課程にいる大学院生の研究は最も先端的で学問を推進するものといえます。その成果は学会発表や論文として公表されますが、これまで一般に紹介されることはあまりありませんでした。総合研究博物館では大学の研究教育の成果を広く社会に発信することが必要かつ重要であると考え、昨年度初めて「学位記」展を開催しました。

昨年度はこの「学位記」ということば自体が一般には

なじみが薄く、イメージされたものと展示とにずれがあるという意見も聞かれました。そこで今年度は副題を—博士研究にふれる—として、展示内容が博士研究の内容であることを示しました。

さて今年度は展示会場に「大地球儀」を置くことにしました。この地球儀は関東大震災で本学の図書館が火災にあい、50万冊もの書籍が消失したことに對してベルギーから贈られたものとして知られているものです。この機会にこの地球儀を展示し、学問の世界を象徴することにしました。

今回は17の博士研究を紹介しますが、内容は芸術、政治、動物学、宇宙学、最新のコンピュータ科学、工学までさまざまにわたって広範におよんでいます。また理論研究から、材料を重視した研究、あるいは基礎科学から社会との関連を強く意識した研究まで多岐におよんでいます。それでもこれらの研究は数からすれば、産み出される研究のほんの一握りにすぎません。このような学位の紹介を展示するのはおそらくわが国で初めての試みと思われます。内容は学問の世界の最先端をゆくものばかりですが、それを高校生にもわかることばで紹介することに苦心しました。

このほか学位記の資料を展示しますが、今回は特に女性博士第一号である保井コノ博士のプロフィールを紹介するコーナーを設けました。保井博士の人柄、当時の女性を取り巻く社会環境の現代との違いなどを考える上で意義深い展示になりました。なお、「学位記」展開催中の7月31日(木)にオープンキャンパスがあり、このときに高校生たちに同じ展示を解放します。この日は展示の解説があります。

会場：総合研究博物館

主催：「東京大学学位記」展実行委員会

会期：平成15年7月19日(土)~9月7日(日)

月曜日休館

(ただし、7/21(月)は開館で翌日7/22

(火)に休館)

開館時間：10時~17時(ただし入館は16時30分まで)

入場：無料

問い合わせ：ハローダイヤル 03-5777-8600

ホームページ：<http://www.um.u-tokyo.ac.jp/>



昨年度のオープンキャンパス。医学用ロボットの展示で解説を聞く高校生

(総合研究博物館)

≡ 事務連絡 ≡

人 事 異 動 (教 官)

発令年月日	氏 名	異動内容 (新官職)	旧 (現) 官職等
15. 6. 30	川 島 秀 俊	(辞 職) 辞 職	大学院医学系研究科助教授
15. 6. 16	平 野 聡 〃 岡 田 文 雄	(採 用) 大学院法学政治学研究科助教授 大学院工学系研究科助教授	大学院法学政治学研究科研究生 大学院工学系研究科寄付講座教員
15. 6. 16	佐 藤 光 三	(昇 任) 大学院工学系研究科教授	大学院工学系研究科助教授
15. 7. 1	増 井 良 啓	大学院法学政治学研究科教授	大学院法学政治学研究科附属ビジネスロー センター助教授
〃	玉 置 泰 裕	大学院医学系研究科助教授	医学部講師
〃	原 田 央	大学院法学政治学研究科助教授	大学院法学政治学研究科講師
〃	吉 田 朋 広	大学院数理科学研究科教授	大学院数理科学研究科助教授
〃	西 山 真	生物生産工学研究センター教授 (配 置 換)	生物生産工学研究センター助教授
15. 6. 16	重 松 宏	医学部助教授	大学院医学系研究科外科学専攻臓器病態外 科学講座血管外科学分野助教授
〃	白 木 靖 寛	大学院工学系研究科教授	大学院工学系研究科附属量子相エレクトロ ニクス研究センター半導体工学領域教授
〃	市 川 昌 和	大学院工学系研究科附属量子相エレクトロ ニクス研究センター教授	大学院工学系研究科物理工学専攻物理工学 講座半導体ナノ工学領域教授
〃	卜 部 卓	地震研究所附属火山噴火予知研究推進セン ター助教授	地震研究所附属地震地殻変動観測センター 助教授
15. 7. 1	班 目 春 樹	大学院工学系研究科教授	大学院工学系研究科附属原子力工学研究施 設原子炉本部先端原子力安全工学領域教授
〃	寺 井 隆 幸	大学院工学系研究科附属原子力工学研究施 設教授	大学院工学系研究科教授
15. 6. 16	永 井 良 三	(併任解除) 医学部附属病院手術部長の併任を解除する (併 任)	大学院医学系研究科教授
15. 6. 16	重 松 宏	医学部附属病院手術部長	医学部助教授
〃	平 井 久 丸	医学部附属病院無菌治療部長	大学院医学系研究科教授
15. 7. 1	濱 口 桂 一 郎	大学院法学政治学研究科附属比較法政国際 センター教授	厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課主 任雇用均等行政監察官
〃	芹 澤 武	先端科学技術研究センター助教授	鹿児島大学大学院理工学研究科助教授

人 事 異 動 (事 務 官)

発令年月日	氏 名	異動内容 (新官職)	旧 (現) 官職等
15. 7. 1	中 野 浩 子	医学部附属病院総務課専門職員	日本学術振興会国際事業部国際研究協力課 交流企画第一係長

≡ 訃 報 ≡

金澤 武 名誉教授

本学名誉教授金澤武先生は、平成15年5月26日、ご病気のため、82歳で逝去されました。先生は、東京帝国大学第一工学部船舶工学科を昭和18年9月にご卒業になり、同大学院を経て、昭和20年東京帝国大学第一工学部講師として任官されました。翌21年助教授、昭和31年には弱冠36歳の若さで教授に就任され、工学部応用力学第三講座をご担任になりました。昭和56年に退官されるまで、36年の長きにわたり東京大学にあって、その深い学識と高邁な人格によって、研究と教育に多大な貢献をなされました。東京大学退官後は名誉教授の称号を受けられ、その後も長崎総合科学大学教授、千葉工業大学教授を歴任され、後進の教育を続けられました。



ご研究は応用力学の広範な範囲に及びますが、中でも鋼材の脆性破壊研究の世界的権威として精力的にご活躍されました。とりわけ初期の全溶接船に頻発した脆性破壊事故の解明に関連して、いまでは世界標準となった独創的な二重引張試験法の開発、クラックアレスターの研究、さらに欠陥評価法及び、破壊管理制御システムの開発など、多岐にわたる先端研究の陣頭に立ち、多大な業績を挙げられました。これらの歴史に残る先駆的研究成

果は、材料力学、破壊力学、構造工学、溶接工学等の各分野の技術水準の向上に大きく寄与しております。また、造船ばかりでなく、鉄鋼業を中心とする産業の分野に広く適用され、戦後の重工業の復興、成長、安定期に、世界をリードする破壊防止技術によって、先生の研究業績は重工業分野での信頼性、健全性や安全性に多大な貢献をなされました。

学外にあって、(社)日本造船学会、(社)溶接学会、(社)日本溶接協会、(社)高圧力技術協会、(社)鉄鋼協会、(財)日本海事協会、(財)溶接接合工学振興会において、会長・理事長等の要職を歴任され、産業界を含めて、技術開発のご指導をされました。

先生はその卓抜な研究成果によって、若き助教授の時代から数多くの学会賞・学術賞を受賞されてきました。日本造船学会賞、溶接学会賞、鉄鋼協会賞をたびたび受けられ、また昭和43年には藤原科学財団藤原賞を、61年には東レ科学振興財団東レ科学技術賞を受賞されました。昭和57年にはこれらの世界的なご業績に対して紫綬褒章を、また平成2年には勳二等瑞宝章の榮譽を受けておられます。

ここに謹んで哀悼の意を表し、先生のご冥福をお祈り申し上げます。

(大学院工学系研究科・工学部)

駒場と本郷

駒場から本郷に移って4年になる。1990年4月から4年間教養学部情報図形科学教室で助手、その後99年まで助教授、99年から理学系研究科にきた。学生の間は教養学部基礎科学科第二から総合文化研究科に進み、ずっと駒場だったので、都合18年駒場で過ごしてから本郷に「進学」したことになる。

駒場から本郷に来ると、実に様々なことで勝手が違ってとまどう。郵便物の出しかたのような細かなことから、研究費の使い方、教授会の進みかた、およそ思い付く限りのことが違っている。これが同じ大学とはなかなか思えないほどである。

その中でも大きな違いは、やはり講義・会議の数である。具体的な数字は省くが、例えば理学部と教養学部では所属教官の数は2倍も違わ



ない（教養学部のほうが多い）のに、学生は教養課程は3000人、理学部に進学するのは300人で10倍違う。このことが一体どれほどの違いをもたらすかは、なかなかここに書き切れるものではない。が、ここでは、駒場の教官は負担が大きいとか、そういうことを問題にしたいわけではない（もちろん負担は大きいわけだが）。問題は、前期課程の学生に東京大学が提供している教育の質である。教養学部の教官は非常に努力していることはいうまでもない。しかし、学部の4年間を東大

で学ぶ学生にとって何が良いかという観点から見た時、前期課程を担当する教官の数と後期課程を担当する教官の数が大きく異なる現状は最適解から大きく外れている可能性が高い。

教養学部は10年前に大きな教育制度の改革を行い、今また進学振り分け制度の変更等が議論されている。しかし、学生にとって真に意味のある改革をするためには、いくつかの「暗黙の前提」を外す必要があるのではないだろうか。

（大学院理学系研究科 牧野淳一郎）

（淡青評論は、学内の職員の方々にお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。）

◇広報室からのお知らせ

平成15年度「学内広報」の発行日及び原稿締切日を、東京大学のホームページに掲載しました。

URL: <http://www.adm.u-tokyo.ac.jp/soumu/soumu/kouhou.htm>

〔訂正〕

「学内広報」No.1266（2003.6.25）において、一部誤りがありましたので、訂正して、お詫びします。

10ページ右段20行目

（誤）人文社会科学系研究科 → （正）人文社会系研究科

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、総務課広報室を通じて行ってください。

No 1267

2003年7月9日

東京大学広報委員会

〒113-8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号

東京大学総務課広報室 ☎ (3811) 3393

e-mail kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

ホームページ <http://www.u-tokyo.ac.jp/index-j.html>